
In The Material ?=? World's Truth

シャーペン芯ケース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In The Material ? Ⅱ ?
World's
Truth

【Nコード】

N9610N

【作者名】

シャーペン芯ケース

【あらすじ】

遂に『悪魔の王』ディアボロスの口で語られた『真実』。

アイは、世界の『意思』を憎む。

しかし、義妹・アリアと共に生き抜く為、強くなり、『救世主』メシアとの戦いに勝つ為の訓練を始める。

そして、遂に来る、永遠の生を生きてきた『救世主』との戦い。

世界の『意思』の真実。

アイとアリアの為すべき事とは？

これは、『In The Material ? 』 Anot
her World』の続編です。

この部から読み始めると意味不明な出来事になる可能性があるので、読むのでしたら、そちらからどうぞ。

、 R15は一応つけたものです。もしかしたらの範疇です。

お知らせ

この、第三作目。

二作目を見てくれた方にはお伝えしてあると思いますが、二作目とあまり間隔を空けないように投稿していこうと思っています。

一作目、二作目と見てくれた人には、今まで続けて見てくれた事に感謝します。

二作目から、見始めた方は、そうそう居ないでしょうが、もしいたら、その方にも感謝。

そして、これを試しに見ている方。
もし興味がありませんでしたら、一作目から、不甲斐なく、文才の無い私の作品を見てくださいと嬉しい限りです。

この次から投稿していきたいと思います。
また、前回、前々回と同じように、毎日投稿していきたいので、よろしくおねがいします。

作品の中で、何か質問のようなものがあつたのなら、随時、お聞きします。

では、これからも私、伊墨雄弥の作品を、よろしくおねがいします。

第一話 訓練（修行）場所（前書き）

間を空けない様に投稿！

第一話 訓練（修行）場所

「……それで、『救世主^{メシア}』が来る時期は分かるのか王？」

俺は目の前にいる少年に聞く。

それによつて、『悪魔の王^{ディアボロス}』とマスターにつけてもらう訓練^{しゅんれん}の内容も急がなければならぬからだ。

「大丈夫だ。

先ほど話した事実だが、アレは実を言うと先代『悪魔の王』から聞かされた話だ。

あちら側では、勿論下位の部下には話していないが

『王』のみに伝えられる使命として、自分の次に

この戦争に参加しなければいけない者に、事実を話さなければいけない。

悪魔は寿命が長いからな。

そして、その、『意思』による戦争経験者の先代によれば、

『救世主^{メシア}』は、まずは各地で人助けや国助けをし、

そして民衆や国家の信用を得ていき、最終的には、我々三人を追い詰めるつもりだ」

「どういうこと？」

妹が疑問の声を発する。

「つまりな、奴は人民を救うために、俺ら三人を殺すだけでもなく、社会的にも抹殺したいってことだよ」

「『跳躍者』^{ジャンパー}の言つとおりだ。

奴、『救世主』^{メシア}は、それほどまでに我々の存在の抹殺に固執している。

そこまでしなければ気が済まないんだよ」

「なら、奴が来るのは時がある程度経ってから、か？」

「そうだ。

先代によれば、自分がこちら側に現れてから、きつかり『1100日』目に攻め込んできたらしい。

それも、民衆と国家の支持を受けているにも関わらず、たった一人でな」

たった三年で世界全体の国と民衆の支持を受ける、か。

俺達と敵対しなかったならば、こんなに頼れる奴はいないな。

……ただの理想論だな。

「そこまでなのか、『救世主』^{メシア}の強さは」

「ああ。奴が本気になれば、国の一つなど一週間で陥落できる」

その強さに追いつき、追い越さねば、アリアを守れない。

そして、元の世界に帰る方法を見つけることさえできない。

「で、何処でやるんだ訓練は？」^{しゅんれん}

こっちにいても、直ぐに指名手配でもされそうだよ？」

確かに妹の言つとおりだ。

下手したら、俺達に関わっているマスターの情報も見つけ、

マスターにまで危害が加えられるかもしれない。

「それは「それは心配ありません。お二方」……人の台詞をとるな」
いつの間にか、『^{ディアボロス}悪魔の王』の話の間に入っていた、
従者の女性が居た。

「貴方様に言われた通り、準備が整いました。
完璧に、120%こちらの環境を真似て作りました」

「そうか。なら良い。下がっていいぞ」^{ベギアアデ}「色欲」

「はい。あちら側でお待ちしております」

そう言ったと思ったら、また一瞬でいつの間にか消えていた。
っていうか^{ベギアアデ}「色欲」って。

「なあアリア。俺達、初めてアイツの名前聞かなかった？」

「あ、ああ。そうだよな……」

「ああ。話していなかったか。
アイツは、我直属の部下の七人の一人で、名を^{ベギアアデ}「色欲」と言う。
まあ、こちら側で言う『七つの大罪』の対応悪魔と思えばそれで良
い」

そうだったのかよ……。

「あ、それより、向こう側が何とかって！」

と、その瞬間、

フツと視界が歪んだと思ったら、

いつの間にか、

大草原のど真ん中に立っていた。

「「ここ、何処だよ……」」

あ、思いっきりハモツた。

第一話 訓練（修行）場所（後書き）

いや、これから見始めた人いませんよねさすがに。
だってこの話から見たら、専門用語の連発で軽く死ねますもの。

第二話 地獄逝き『片道』切符

「此処は向こう側で言うところの、悪魔の巣窟。

そう！ 感激しただろう？ 我に着いて来た『跳躍者』と『天使の末裔』。

お前らが人間と天使の身にて、初めて此処に来た者達だ！」

後ろから声がし、そちらに振り返ると、『ディアボロス悪魔の王』が居た。

「此処が、悪魔達が住む場所か。

それにしても、俺らの世界に似せすぎだろ」

「当たり前だ。私の部下を総動員させて、私の所有する敷地内に作ったのだからな」

「……それで、此処で私とアイ兄が修行つけてもらうのか？」

すると、更にまた後ろから声が聞こえる。

「私もここにいます。

交互に、別々の範囲の修行をつける、で、いいのだよな、王様？」

この声は……マスターだ。

後ろから、マスターが歩いてきて、そして『ディアボロス悪魔の王』の横に付く。

「別々の範囲？」

「そうだ。我と貴殿、二人で二人をやるより、一人一人ずつで修行をつけた方が、

効率も良いし、我らも助かると思ってな。

まずは、我は魔力調整、魔力制御、魔力操作、魔力増幅、魔力纏鎧の修行をつけてやる。

一回二回死ぬぐらいは覚悟しておけ」

ディアボロス

『悪魔の王』は、真剣な表情で俺達に話す。

自然、俺と妹も気が引き締まる。

……っていうか、死ぬ覚悟って、死ぬの確定！？

すると、マスター、こちら真剣な表情でこちらを見てくる。

「私も、先ほどの話とは無関係だが、

お前ら二人は家族だ。だから、修行をつけて、誰が相手でも死ぬないようにしてやる。

私がやることは、お前らに実戦を教えることだ！

アイ、今度こそ私が本気で修行をつけてやる！ 覚悟しておけッ！」

……キャラが違うよオマスターアア！

というか死ねないって何！？

「……なあなあ、アイ兄」

「ん？ 何だ？」

アリアが俺に、二人に聞こえない程度の声で話しかけてくる。

「あのさ、これじゃさ、」

「うんうん」

「絶対に、確実に、『救世主^{メシア}』に会う前に、
私ら二人、あの二人に殺されるよな？」

「……………激しく同意」

すると、俺ら二人の話など、どこ吹く風な『悪魔の王^{ディアボロス}』は、
こちらに歩いてきた。

「……………さて、説明は済んだので、まずは…………『跳躍者^{ジャンパー}』……！」

「ひッ！ は、ハイッ！！？」

声が裏返った…………。

「まずは、『跳躍者^{ジャンパー}』。お前から地獄行きだ。
安心しろ、ここは地獄だが、更に最下層まで連れて行ってやる！
我と七人の従者も相手してやるから覚悟しろ！」

いきなり、有無も言わず俺の右手を掴むと、
タンッ

と、足で地面を叩いた。

こ、これって…………。

次の瞬間、俺は、落ちていた…………。

「あ、あああああああああああああ……………！！！！！！……………？？？
……………」

SIDE
アリア

今、目の前で兄さんが、『悪魔の王』と一緒に、
地獄に連れられていった……。

「……アイ兄。ちゃんと帰って来てよ……」
（訳・ご冥福をお祈りします）

と、いつの間にか、

ガシツ

「え？」

そんな擬音がつくぐらい、私の、わ、わた、わたた、わたしの、か、
肩に、

「……アイの、心配をしている暇が、あるのかな？　アリア？」

[illegible]

「いやあああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

第二話 地獄逝き『片道』切符（後書き）

次話からは、それぞれの修行風景を別々に書きたいと思います。

「くくつ、その驚き顔面白……。」

因みにあと300m程で河に落ちる。衝撃に備える」

……

「て、てめヒユッ！ こ、殺すぎが！」

「当たり前だ」

テメエこの『ディアボロス悪魔の王』！

絶対死んでも呪い殺す！

……アレ？

何か忘れてるような……。

もう眼前に河の流れが！

「ッ！ 能力発動！

対象、俺！ 効果、噴射！」

次の瞬間、超能力の最大出力で、1tもの空気が体を包む感触がする。

「……この感触。そうだ、俺には『能力』がある！」

「……それが『ジャンパー跳躍者』のみが持つ異界の力か。
よし、それを見せてくれれば良い」

……何だ？ まさかこの度胸試し？で終わりじゃないかな？
それじゃコレを見てるとk……何でも無い。

「ならば……」

既に俺は空気の塊に包まれ、河の水面上を浮遊している。
そして、気持ちを落ち着け、一応、外的魔力の強化魔法を体全体に
かけておく。

「何をするん、ッ！？」

あ……れ……？

な……んか、暗く……

「ぐヴッ！？」

……つで、ディアボ……ろすッ！ な、にを……」

水面上に倒れる感触。

ああ、以外と浅かったんだな。

胃や肺から溢れ出してくる生暖かい感じ。

……久しぶりに感じる、

「どうだ『跳躍者』？
ジャンパー

久しぶりに感じる『死』の感覚は？」

『悪魔の王』ディアボロスの声がする。
そっか。これが……『死』。

俺程度の力などでは抗いようの無い、運命。

「……そうか……これが……『死』か……」

何やってんだろうな。

さっさと修行終わらせて、妹を守って、

皆で『救世主^{メシア}』倒して、

早く、元の世界に戻って……それで、それで、

「……………紫……………」

愛する人に、会いたい。

一番最初。この俺に、意味をくれて、居場所をくれて、
それで、何かをくれた人。

「会いたい」

どんどんと悪くなっていく視界の中、
俺は、最後にふと笑った『悪魔の王^{ディアボロス}』を見た。

第三話 修行風景／アイ・一視目／（後書き）

別に感動シーンを書くつもりなどこれっぽっちもない。
これだって、別に何もないもの、多分。

感想、その他色々ありましたらどうぞ。

第四話 修行風景／アリア・一視目／

今……私は義父さんの前にいる。

義父さんは、私の目を見ながら口を動かす。

「私はこれからしばらくは、アリア、お前の修行をつけよう。
だが、最初にこれだけは言っておく。

……途中で音を上げるな。以上！」

それだけ？

つてか、義父さんが強いのは分かるけど、何すんだ？

「まずはお前をころ……お前と模擬戦でもして、力量を測るつもり
だったか、

……正直に言っと、お前は、まだ私と戦えるレベルでは、ない」

「なっ！ 私だって一生懸命頑張ったんだ！

そこまで言う必要なんて「甘えるな」………！！」

義父さんは、いつもの優しい笑顔ではなく、
真剣な表情でこちらを見る。

そこからは、殺気すら感じられる気がする。

「あの王から聞いた。

お前はまだ、『四人』とやらの中で、唯一『覚醒』とやらをしてい
ないんだっとな。

……まずは、その『覚醒』とやらを済ます。

だが、それだけに頼りきってはお前の負けだ。

まずは、基礎の中の基礎から鍛えなおしてやる」

「……………！！」

今改めて、義父さんの言葉で思い知った。

私は、この中で一番の足手まといだった。

ディアボロス

『悪魔の王』に兄と一緒に会った時は、

最後までアイ兄に助けてもらって、私は何もしていない。

「……………よろしく……………お願いします」

「ああ。」

まずは、私の指通りに動け。それが訓練だ」

「はい……………」

「まずは小手調べだ！

外的魔力強化を全身に。

そして、

『ストーム・ダンス』重複発動同時四回！」

「なっ！」

『ストーム・ダンス』重複四回？

何の拷問だそれは！ 無茶すぎる！

「何をしている？ さっさとやれ！」

「……………はい！」

外的魔力強化、『全身』！

風の精霊、我に答えよ。『ストーム・ダンス』！

同時発動！ 風の精霊達よ、我に更なる力を！ 『ストーム・ダンス』重複四回！』

詠唱＋複数魔法行使詠唱を済ませる瞬間、体に風が纏われ、それが段々と

数を増していき、それと比例して体が軽くなるのを感じる。

しかし、

「は、あッ！？ はあ……………くッ！」

体を突然襲う疲労感。

それと同時に、必死に耐えなければ、直ぐに意識を奪われそうな感覚。

しかし、義父さんの感情の籠ってない声は、無情にも次の指示を出す。

「よし。それで良い。
では次だ。

『ストーミング・ジャベリン』で、属性は水。
投擲用の投槍を二個同時生成』

！？

この風属性を大量に使ってなお、水属性の武器生成を二つ！！？

義父さんは私を殺す気！？

「はぁ……………はッ！　く……………」

水の精霊、我に答えよ。『ストーミング・ジャベリン』！

同時発動！　水の精霊達よ、我に更なる力を！　『ストーミング・ジャベリン』重複二回！」

水の固まったような、それでいて液体のような不思議な感触。そして、それが短めの槍の形をしたものが、両手に握られた。

だけど……………」

「ぐ……………はぁッ！　ハア！　も、もう……………だ、駄目……………」

次の瞬間、気付いたときには、

もう既に、両手の水の投槍は消し飛び、風で軽くなっていたはずの体は、

いつもの何倍もの重さのように感じて、更には、体を強化していた外的魔力もなくなるのが感じた。

「は……………ぁ……………ぁ……………」

そして、強制的に、自らの視界が閉ざされた。他ならぬ自分の意思によって……………。

第四話 修行風景／アリア・一視点／（後書き）

そうとうハードですね。

文才がないから、分かりにくいかもしれませんが、自分に例えれば、

10? 走らされたあと、休みなしで筋トレさせられたようなものです。

まあ、自分では10km走れるかも分かりませんが（笑）

感想などなど、お待ちしております。

第五話 修行風景／アイ・ニ視目／（前書き）

この頃スランプでg d g d過ぎてすみません……。
ですが、それでも見続けてくれる人に感謝、感謝です。

第五話 修行風景／アイ・二視目／

「……此処は？」

ずっと眠っていたみたいに、自分の体はだるく、
関節もポキポキと音を立てる。

今、横になっていた場所から立ち上がる。

……立ち上がって分かったが、どうやら俺はそのまま床に眠っていたらしい。

しかし、床は木などでは無く、石でできた冷たいもの。

「……知らない部屋だ。

だけど俺はどうして………？」

「思い出せないか？」

目の前にある木の簡易な扉から声がする。

そして、その扉が、古めかしい、ギイイイと
木が軋む音を立てながら開く。

そこに立っていた声の主。

「まあ、仕方がないだろう。

一瞬で意識を刈り取られたのだからな」

「『ディアボロス悪魔の王』！」

……ッ！　そうか、俺は！」

俺の様子を見て、『悪魔の王』ディアボロスはクツクツと笑う。

「やっと今更になって思い出したか」

「お前！ 俺を殺したのか！？」

俺の記憶にある最後は、自分自身が『死』を感じるもの。しかし、現に俺は生きている。

「安心しろ。まだお前は死んでいない。
いや……寧ろそれよりも悪い状況と言っても良いんじゃないか？」

「なんなんだよ……………」。
死んでないとか、下手したら更に悪いとか。
俺はどうなってんだよ！？」

俺は訳が分からない状況で、
目の前の少年姿の『悪魔の王』ディアボロスを問い詰める。
が、ソイツは飄々とそれを受け流す。

「別にどうでも良いだろう。「よくねえ！」
……意外とせっかちな『跳躍者』ジャンパー……………」

「うるせえ！ これぐらい当たり前だ！」

「まあ良い。」

一言で言えば、お前は悪魔になる」

……………はい？

いきなりトチ狂ったこと言い始めたぞコイツ。

「……王を、何だコイツみたいな目で見ろな。
まあ、王は寛大だからどうでも良いから説明する。

つまりだ……」

それからしばらく、長ったらしい『ディアボロス悪魔の王』の演説が始まった。

（10分経過）（体感で多分）

「……という訳だ。分かったか？」

「……なるほどね。ってかなんじゃそれア！
ふざけんな！ 『メシア救世主』と戦う以前に人として問題あるわ！」

「我は悪魔の王だ」

「俺のことだ！ 俺は人だ！」

つまるところ、コイツが言うには、

まず、悪魔は人間の魂を食事とするのだが、
設定上一（電波？）、悪魔は自分の自由意志で、相手を殺した場合に
魂を保管し、それを悪魔とすることができる……らしい。

更に簡潔に言つと、

俺は、『ディアボロス悪魔の王』に殺？されたことによって、
魂の根源から悪魔となる準備が着々と進行しているらしい。

「てめえ、ハナ最初っからコレが目的かよ」

「いやいや、王を見くびるなと何度言わせる。

我は『ジャンパー跳躍者』無しでも、十分世界を掌握できる力などとうに持っている。

貴様など必要無い」

「じゃあなんでだよ！？ まさか修行の為とかふざけた事抜かしやがるか！？」

「その通りだ」

「ッ！！？ てつめえ！ ふざけんな！ 元に戻しやがれ！
悪魔になっちまったら戻れねえよ！」

「そうだ。

だからこそ、貴様は自分の力で止めて見せる。
我に、王直々の悪魔変換を止める所を見せる。
それが修行内容だ。

そして、それを妨害する役も用意した」

「ふざけんなって言うてんだろ！
修行ってそれかよ！？」

しかし、『ディアボロス悪魔の王』は俺の罵倒を無視し、
俺に近づきながら言う。

「……安心しろ。死ねない程度に痛めつけてやる。二度と陽の目が見れない体にしてやるよ」

え？

ええ？」

「因みに言っておくが、悪魔変換は、体のエネルギーが免疫となっている。つまり、体を強く動かし、体力を使えば使う程、悪魔への素晴らしき一歩が早まるという訳だ」

「ハア！？ てめえ！ マジで俺を悪魔にする気なのかよ！？？」

「……お前ら、コイツの相手をしてやれ」

と、その瞬間、

また、そうだった。

まばたきをした瞬間に、その場所に居たような感じ。

「「「「「よろしくおねがいします（しまーす）（してね）」

傍から見れば最高の美貌を持つ、七人がそこに現れた。

第五話 修行風景／アイ・ニ視目／（後書き）

すみません。

またもやこんなんです。

アンケート（必須項目……なのか？）（前書き）

さて、近頃のスランプと、

忙しい程忙しい学校あーんどその他が相まって、

凄くgdgdになってきた今日この頃。

アンケート（必須項目……なのか？）

皆さんこんばんは？

これを昼に見てる人にはこんにちは。

朝に見た人はオハヨウございます。

今回、前書きにもあるように、

近頃、「そこまで書いてねえだろ！」と言われそうでございますが、
凄くスランプで、執筆が思うようにいきません。

ですが、自分でもわかっているのですが、

毎日投稿と宣言したからには、それを突き通すのが自称・漢^{おとこ}
なので、頑張ってます。（自談）

ですが、遂にもう限界が来て、

「もうこの小説が書けるかわかりません。

なので、この小説は一旦打ち切り。

そして、続きはいつか……でよろしくお願いします」

と、言うわけです。

……と、言うのは半分冗談であり、

今回は、私の執筆意欲を340%程向上させる為に、皆さんの意見を頂きたいのです。

これからのアンケートには、即行で答えてくれるとありがたいです。

1・修行を飛ばすかどうか。

2・もっと他視点も映すべきか。

だけです。（アレ？）

はっきり言って、自分でもこの作品、結構読者―（感想も）減ってきたな……

と思うので、その他、何か意見があったらどうぞ。

しばらくは、修行風景を書くので、なるべく早めに感想に答えを書いてくれると嬉しいです。

ではわ、これからも不肖、伊墨雄弥をよろしく願います。

アンケート（必須項目……なのか？）（後書き）

……最近なんかネガティブに……

第六話 悪魔変換くアイ・一死目く（前書き）

一死つてのは気にしないでください。

人間をやめるって意味だと強引に思ってくれれば……。

第六話 悪魔変換くアイ・一死目く

「……………もしかして……………」

俺は、目の前にいきなり出現した七人の女達を見ながら、横にいる『悪魔の王』ディアボロスを見ながら問う。

「まあ、『跳躍者』ジャンパーの考えている通りだ。
おい、お前ら、『跳躍者』ジャンパーに自己紹介してやれ」

すると次々に個々の返事をする七人。
だが、その返事には統一性が無く、纏めるとか、何それおいしいの？的なことになってる。

「俺は『傲慢』アロガンツ。俺様がお前の面倒を見てやる。
光栄に思えよ、『跳躍者』ジャンパー」

自らを『傲慢』だと名乗る、俺様口調の女。
見た目は、漆黒の、恐らく日本人よりも黒い、肩にかかる程度の髪の、超・上から目線な女。
因みに目は紅く、けれど美人。

続いてどんどん自己紹介していく。

つてか、さっきまでの半シリアス雰囲気は何処に？

「私は……………」

なあ、喋るのメンドい」

「さっさとしろー！」

いきなり『ディアボロス悪魔の王』がキレた！

まあ、大体予想つくけどさ、露骨過ぎね？

「はあ……私は、『ファウルハイト怠惰』。

長いからファウルでいゝよ。……終わり」

今度は、髪は肩甲骨辺り、白髪でボツサボサの、
寝癖だらけのタレ目一（やっぱり紅い）の、いかにもメンドい空気を醸し出してる、けれど美少女。

「私は『ツォルン憤怒』。

さつさと次に回しやがれ糞野郎」

……妹より女性らしくない人いましたあ！
ってというか悪魔ですけどね！

だが、髪は床にギリギリつかない程度の真っ赤な長髪。
そして端正で、やはり綺麗なのだが、

「ああ？ 何ジロジロ見てんの？」

「い、いや何でも」

すみません。

その緑―で翡翠な威圧感タップリの相貌で睨まれると怖いんですが
！？

背筋が凍る！

「次は……って、あれ？」

先ほど『ディアボロス悪魔の王』に返事した七人が、
いつの間にか今自己紹介した三人だけになっている。

「これからこの三人と戦うのだ。
残りの四人は、その次で会うだろう」

つまり、めんどくさいから逃走って訳ですよ、はい。
やっぱ『七つの大罪』の残りだから、『色欲』、『暴食』、『強欲』
、『嫉妬』だよな。

それにしても、クセの強い人ばかり残ったな。
だって、『傲慢』に『怠惰』に『憤怒』だよ！？

……まあ、皆さんがクセ強いのもかもしれないけどさ。
ハガンだって、皆さんアレだしね。PrideにSlothにWrathだよ？

あれ？ またまた電波？

それよりも、悪魔変換って、まだまだ時間あんのか？

「なあ、悪魔変換って言って、さっきは焦ったけど、まだまだ時間あんのか？」

「まあ、今なら、な。
………殺れ」

いきなり物騒なことを『ディアボロス悪魔の王』が呟いた瞬間、
ってか殺れって何だ！

「うおッ!？」

風が吹き、嫌な予感がした。

そして瞬間的に咄嗟に後ろへ三步ほど跳んだ、次には、

バキィッ!

と、まるで石が木の様に壊れる感じの音になって、

やはり本当に、さっきまで俺が立っていた場所には、石の瓦礫があった。

いや、できていた。

何者かの干渉によって、石が粉碎された。

『ディアボロス悪魔の王』を睨むと、

ある異変に気付いた。

先ほどまであり、今は見つからないもの。

「……『アロガンツ傲慢』は、どこいった？」

あの、ファイア マ……じゃなくて!

俺様口調の『アロガンツ傲慢』が、『ファウルハイト怠惰』と『ツォルン憤怒』を
その場に残し、姿を消していた。

「うゝ、答えるのメンドい」

「そんなのも分からんか。」

やはり先程のはマグレか。がっかりだな」

『怠惰』と『憤怒』がそれぞれ、俺の問いに答えになってない答えを返す。

と、

「……今からは……俺様の、独壇場（支配）だ！」

「なっ！！！？？」

突如、上から風が吹き、

先程と同じ風だったので、今度は右に跳んだ。必死に。

そしてまた、

俺の元居た場所の石は、粉々になっていた。

だが、先程と一つ違う箇所がある。

そう。

そこには、

「……何度も言うが、光栄に思え」

『傲慢』^{アロガンツ}が、こちらを見下しながら、立っていた。

第六話 悪魔変換くアイ・一死目く（後書き）

でした。

『傲慢』『怠惰』『憤怒』。

イメージそのままに書きました。

因みに、久しぶりに禁書21巻を読み、感想を一通のみ読み、

まだ感想は受け付けますが、結構元気でまくりました。

瞬間ヤル気力478%アップ。

まあ、瞬間なんで。

これからも、私の小説よろしくお願いします！

第七話 修行風景／アリア・三視目／

「……やっぱ寝て……気絶したのか？」

私は、草原のど真ん中で目を覚ます。

しかし、其処はただの草原ではない。私とアイ兄の修行のために、

『ディアボロス悪魔の王』が用意した場所だ。

気絶？する前は、義父さんと魔法の修行をしていたはずなんだけど……。

「ああ、多分、内的魔力の最高値の使用許容量を越えたんだろう。まあ、一週間程度気絶してただけだから、大丈夫だぞ」

「義父さん？」

「つていうか一週間つて長いよね。起こさなくて良かったの？」

「いつのまにか目の前の小岩に座ってこちらを見ている義父さんに答える。」

「まあ、許容量を越えれば越える程、それ以上に魔力最高値が高くなるつていう定番だからな。」

「その為の内的魔力の回復を邪魔する訳にはいかない」

「そっか。」

「……で、どれだけ増えたの？」

「一週間で寝てたんだから、これで増えてないとか言ったら泣くよ？」

「まったく、アリアは話が早い……。」

安心しろ、お前の成長速度にははつきり言って驚かされっぱなしだ。増えてる？ ふざけるな、アレはそういう物ではないよ」

少し額に青筋を浮かべながら落ち着きが無くなってくる義父さん。

ちよつとちよつと、何があつたか知らないけど、いきなり一方的に小ギレしないでよ。

凄い期待？されてるのか？

「……そうだな、簡単に端折りまくって答えれば………」

ごくっ

と自分の喉が唾を飲み込む音が聞こえる。
な、何なんだ？

「……………」『ふざけるな』」

「だからそれはもういいって！
ちゃんと答えてよ！ 今一応シリアスパートなんだからさ！
確かにこの頃コメディ要素入りまくりだけどさ！

って、何言ってるんだ私？」

「お前は凄いよ、ああ」

あれ？

何かスルーされた。

「お前は、一回だけ魔力を使い切っただけで、
私に近づく程の魔力を獲得したんだからな。私としては面目丸つぶ

れだ」

「はい？ …………… ってエ！ そんなに増えてたのかぁ！！！？？」
「？」

それだったらキレなくなる理由もわかるけどさ。

だけどそんな会話に自然に割り込ませないでちゃんと伝えてくれ！！！！

「まあ、まだまだお前には戦闘経験が足りない。
それを埋めていく事から始めようか」

けど、どうやって？

まさかまた義父さんと！？ それは勘弁だ。死にたくないし。

「アリアの事だから、『死にたくない』とか思っているのだろう？
安心して良い。そこらへんはあの王に話をつけた。今さっきな」

ディアボロス
『悪魔の王』か。

アイツのやる事だからどうも信用ならないけど、今は強くなる方が
先だ！

「義父さん！ ……ところで誰と戦うんだ？」

「えーっと、確か王によると………… ああ、あの女の人………… 悪魔だけど、
あの従者だよ。

悪魔の王に仕える『七つの大罪』とか言う七人の一人だったかな？」

「エ……………？」

なにそれこわい。

そっちの方が死にそんな感じがしてきたよアイ兄……、義父さん……。

「だ、誰だって……？」

「確か、『^{ベギーアデ}色欲』だったか？」

あの人だ————！！！！

第八話 悪魔変換くアイ・ニ死目く

ひゅー!!!

と、隙間風が吹くような音を立てて、なぜか突風が吹いてくる予兆を感じる。これも能力の応用なのだが……

「うオツ!!??」

また咄嗟にジャンプする。

するとその突風は、俺の予想通りに、浮いた両足と床の間をすり抜け、

後ろの石でできた壁に当たり、壁を砕く。

「避けてるだけか？」

また、声が聞こえる。

それも、風が当たった壁の方から。

「グうつつ!!??」

後ろから、普通のパンチが飛び、背中当たった。

一瞬で肺の空気が外に流れ出し、呼吸が瞬間的に止まる。

「ゲホツガハっ!!!」

「……さっさと起きろ『ジャンパー跳躍者』。
俺様は早く帰りたいんだ」

『傲慢』^{アロガンツ}の聲が、いつ来たのか、すぐ横で聞こえる。

俺は、蹲っていた場所から立ち、声の方を向く。

「能力発動！ 対象、空気！
能力、『操作』！」

自身の超能力、『マテリアルコントロール』^{マテリアルコントロール}を使い、
周りの空気を操作、それらを圧縮、弾の形を一瞬で形成させ、放った！

「だから……何度言わせるか。俺様相手なのに失礼だぞ？」

また、まただ。

ヒュウウアッ！！

と、今度は、とても甲高い風の音が聞こえ、
突風が俺をすぎる。

今度は避けられなかった。が、

「あれ？ 何も……ない？」

床や壁を割るはずの一撃は、だが、なぜか俺を無傷でいさせた。
いや、元々正体も分からない攻撃。
傷が無くとも不思議ではないのだが。

すると、後ろから声が聞こえる。

「あゝあ。やつちゃったよア口姉^{ねえ}……」。

っていうか寝ていい？」

「だめだろ。それにしても、まだ気付かないかアイツは！」

多分、『ファウルハイト怠惰』と『ツォルン憤怒』だ。

だがしかし、二人の言う意味が分からない。

後ろから、声がまた聞こえる。

しかし、それは二人とは違う声で、しかも俺の首元から響いた。

「それ程まで危機感すらないとはな。

正直言つて失望した。

もし俺様の御眼鏡に適ったなら、

配下の下っ端にしても良いかと思っていたのだが、な」

「！……！」

直ぐ後ろを振り返る。

が、声の主、多分『アロガンツ傲慢』だが、
俺の視界には『ファウルハイト怠惰』と『ツォルン憤怒』の二人が

少し離れている場所に立っている以外、影すら見つからなかった。

「……何処だ！？」

「まったく、本当に気付かないかお前は」

また後ろで聞こえる。

しかし、また居なくなる。

「……能力発動、対象、空気。

発動、『操作』」

この部屋に充満する空気全てを操り、不規則に流す。
その空気の流れを読み、何処にどのような物があるのかを調べていく。

はずだったのだが、

「ガッ……！！！！……？……？……？」

能力は終了された。

いや、強制中断させられた。

これは……痛い。

「……いつのまに。

って、さっきの二人の言葉、そういう意味かよ」

先ほどの『ファウルハイト怠惰』と『ツォルン憤怒』の言葉。

俺は、俺が『アロガンツ傲慢』を見つけられない事へのものだと思ったが、違かった。

口の中に鉄の味が広がる。

そう、いつの間にか、俺は、体の前面と、後ろ首に、
斬撃をくらってたんだ。

っていうか斬撃って、そのままカマイタチみたいなモンか？
まあ、傷が浅いからどうにかなるが……。

しかし、体の力が抜ける。

第八話 悪魔変換くアイ・ニ死目く（後書き）

まあ、アイ君の悪魔への第一歩です！

第九話 風呂…ではなく修行風景〜アリア・四視目〜（前書き）

なんかおかしいことに。

第九話 風呂：ではなく修行風景／アリア・四視目／

「え、えつと、義父さん？ 今なんて？」

「ああ、だから『色欲』^{ベギアアデ}さんだよ」

やっぱりあの『悪魔の王』^{ディアボロス}の側近なんだよな。
だけど、なんで『色欲』^{ベギアアデ}なのにあんな性格？
大体は性格が名前に左右されると思ったんだけどな？

すると、後ろの方から、ザッ、ザッ、と、地面を踏みしめてくる音が聞こえる。

「どうも、こんにちは。」

今回、『天使の末裔』^{エンジェル}様を鍛えさせてもらっ『色欲』^{ベギアアデ}です。
では、これからは私にお任せください」

ついに来た。

「『色欲』^{ベギアアデ}？ だっけ、よろしくな」

「はい。ではいきなりでしょうが……始めたいと思います」
いつの間にか遠くに離れてる義父さん。
良いよな見てる人は。

「では、いきますー！」

シューインッ！！！！！！

「ツツ！！？」

刃物が滑る音を出して、一瞬で死角に回り込んできた！
多分、外的魔力強化をしてなかったらヤバかった。

「（無詠唱っ！）『ストームダンス』！
重複二回！」

！！

魔力が大幅に多くなつたと聞いたから、やってみたがうまくいった！
風を二回纏い、その風に乗るようにすばやく移動しながら、『^{ベギアデ}色欲』
の動きを見る。

「なっ！」

と、思った瞬間、『色欲』の持っている何かの武器は、私の首を捕
らえかけていた
！

「わぁッ！？」

咄嗟の反射で、かがむ私の体。
頭の上を通る刃。

これは……

「鉤爪エっ！！！！？？」

なんつー古臭い武器を使うんだ！？

「よく分かりましたね。まあ、分からないのもどうかと思うんですが」

そしてまたワンテンポ後には、姿が消えている。

相手は鉤爪、こちらはナイフ。

相性が悪すぎる！

「水の精霊、我に答えよ！ 『ストーミング・ランス』！！！」

この手に水でできた槍を作る。

そして、一気に、

「突く！！！！！」

強化された身体能力を用い、『^{ヘギアデ}色欲』の位置を判断し、そこに向かって一気に槍を突き出す。

まあ、本職では無いが、ナイフ、短剣の次は槍系といった感じだ。

しかし、

ザパァッ！！！！

という、水が飛び散る音がして、

そして気がつけば、私の槍は、鉤爪の間に挟まれて、身動きが

「身動きがとれないっ！！！」

そう判断し、水の槍を解除、後ろに跳ぶ。

解除された水の槍は、その瞬間に集まっていた水を飛び散らせる。と、

「……………」

「……………」

「……………（怒）」

「その………すいませんでしたあ！！！！」

その、なんていうか、
弾けとんだ水が、思いつき『ベギーマテ色欲』にかかって、
びしょ濡れになったんだよ。

え？ そんなの修行中には関係ない？
あなた達は私達の気持ち分かってない！
どこその漫画の修行じゃないんだし、女の人を汚したら、すぐ謝る
のが常識だろ！！？

「……………まあ、良いです。
ですが、このままでは女たるもの、いつでも体を清潔にしなければ
いけませんし。」

『エンジェル天使の末裔』様も、ずいぶん汗をかかれていますようです。
………淒く微妙なタイミングですが、水浴びでもしますか？」

それって………風呂？
って、本当になんてタイミングなんだよ！

バトルパートの何行か後が風呂シーンとかふざけてんだろ！

「あ、そうしょうか」

だげどさ、やっぱり俺もこんなでも女だ！
その誘い、受けて立つ！

第九話 風呂…ではなく修行風景〜アリア・四視目〜（後書き）

まあ、次々回はサービスシーン？

第十話 悪魔変換くアイ対『怠惰』く

「ふうあっ!!? おおッ!!! うわあ!!?」

正面、左右から来る打撃をかわしつつ、後退して立て直す。

「なさないよ。……ほら」

すると一瞬で相手の姿が掻き消え……

「そこだッ!」

ザしゅっ!!

と、鈍い音を出して、俺の拳が『ファウルハイト怠惰』の肩にかする。
そしてお互いに距離をとる。

「いや、今は危ないよね。
そっちの手はだめだってば」

まあ、俺の右手なのだが。

あ? 機械じゃないのかって……。

言ってなかったっけ? ああ、駄目作者が前々回に話すの忘れてたからか。

作者曰く、『間違えた訳じゃないんだからねっ!』だそうだ。

俺の右手って、神経つながってるから、自由に動かせるんだが、手の奥深くまでくるような衝撃をくらったら、こっちも痛みを感じるってわけ。

因みに、右手の指から悪魔変換？というヤツが始まったのだが、その黒い何かは俺の右手全部を覆うと、腕のほうには行かなかった。だが、今は左腕全体と、右足の膝までは、その何か黒いものに侵食されてる。

「だからさ、これ機械だから止まったんだろ？
って、つーかあの痛みどうにか為らないのか？」

「いや、アレ無理らし〜よ？」

悪魔変換してる最中って、凄い痛みが猛烈に襲うんだよ。
それも、立ってられないほど。

だが、そんな俺の嘆きも、『怠惰』ファウルハイト相手では意味ねーな……。

「外的強化！ 『全身』！」

強化魔法を全身くまなくかけて、相手に突っ込む。
そして、

「世界の根源よ、我に識^しる力を。 『アスタロトの視権』しけん」

「はあ？ 何それ怖い。まゝ、自身の変換と魔属性を利用しちゃって。

……そろそろ精神も悪魔になってきたのかな？

……そんな人間にとってはふざけてる魔法を使うなんて……。

……長台詞面倒」

「読んだ」

俺は、『怠惰』ファウルハイトの移動中の横っ腹に、回し蹴りを見舞った。

「ぐぶッ!!??? ってゝな。」
女には優しくしろ、よっ」

刹那、俺の左肩にむかつて、相手から拳が振るわれる。
そして、その軌道を、自分が認識するよりも早く、読んだ。

はずだった。

「ぐうッ!!!!!!!!!!?」

直後、左肩に衝撃、そしてそこを中心に、俺は
若干左回りしながら壁に叩きつけられた。

「(何だ? 今、確実にアイツの軌道を読んだはず!?) 何をした
?」

「分からないかな? 分からないよね。」

『傲慢』は速度、そして『怠惰』は惰眠、『憤怒』は力。
これで分かったら君は凄い。」

ヒントは、私達は人間じゃなくて悪魔なんだよね。」

「?? 人間には無い技能?
でもな……ま、良い! 今は反撃!」

と、立ち上がったその瞬間……………

視界がブレなくなった。

「ツツツ！！？？ ん~~~~~~~~」

「！！？？ んだよこれ！？ 声が出ねえ！」

「……いや、これは違う！ 声は出てるけど、それを感じる神経が遅くなってる？」

しかも、視界がブレなくなった。

普通、人間ってのは視界はブレるものだ。

それこそ、世界中探して、動いても視界がブレない奴がいたら凄いや。

だが、今俺はその状態になっている。

と、

「ッ！？」

目の前から、ゆっくり、ゆっくりと、『ファウルハイト怠惰』は歩いてくる。

だが、その動きは、見るからに鈍重で、テープの逆再生でもこれはいできないだろう。

だが、それでも声ができるより早くこちらに着く。

そして、『ファウルハイト怠惰』は、とてもゆっくりとした動きで、

やはり、俺の体全体に、何処から作ったのか、真っ黒な釘を、刺していた。

第十話 悪魔変換くアイ対『怠惰』く（後書き）

決して、後付じゃない！

第十一話 温泉風景〜アリア・『色欲』の本性〜（前書き）

なんか色々と、すいません……。

第十一話 温泉風景〜アリア・『色欲』の本性〜

ぼちゃん

水が滴る音がする。

「う、うう~~~~ん……」

手を頭の上で組んで背伸びする。

「気持ち良い〜……………」

この温泉最高。

なんていうか、全部の疲れが取れてくような、
疲れが染み出すな……。

今、私は温泉に入っている。

なぜ温泉に入っているか。

それは、『色欲^{ベキアデ}』の提案で、風呂に入ることになったからだ。

「それにしても、まさか温泉とはな〜」

風呂、とは聞いていたが、まさかこっちに温泉があるとは思ってもし
なかつたよな。

だけどな、確かに気持ち良いんだが……

「……………何で大きくならないんだ？ それとも、十四でこれは妥
当なのか？」

分からないよな。

「あゝゝゝゝゝ分からねゝゝゝゝゝゝゝ」

自分のモノを揉んで、呻いてると……

「大丈夫ですか？」

「うわぁッ！？　って、何だよ、『色欲』か」

「何だとは失礼ですね。それより、湯加減はどうですか？」

気がつけば、『色欲』は、すぐ私の横で湯に漬かっていた。
まあ、湯加減を聞いてくるのは気が利くよな。

「ああ、大丈夫だ。」

「……………」

「？　どうかしましたか？」

「ハッ！！　あ、いや、何でもない」

つつい、^{ベギーアレ}『色欲』の私の数倍あるであろうアレを凝視したぞ。
っていうか『色欲』、その大きさは無い！

「さ、お背中流しますよ」

「え、ええ！？ い、良いよ別に。私もう十四だぞ？
そんな恥ずかしいって！」

湯から上がった瞬間、いきなり突拍子も無いことを言い出す。

「はは、大丈夫ですよ？」

私達悪魔に比べたら、まだまだ十四なんて赤ちゃんのようなものです。

さ、いきましようか『天使の末裔』？」

そしてガシツと擬音ができるように、私の手を掴んだと思ったら……

「お？ おおおお！！！！？」

そのまま引つ張られた。

こけないように足を横に動かしていると、どんどん周りが暗くなってくる。

そして、

「ここが洗い場です。では失礼」

いつのまにか、少し水が溜まっている、薄暗い、なぜか鍾乳石のある場所にいた。

そしてなぜか『色欲』が持つ、タオルとシャワー。

「ひいうツ！！！！？ え？ ちよつ、止めっ！！！」

私の体中を、泡がたっている手で擦って来る『色欲』。
ってかそこは駄目ッ！

「ひゃあああうつつッ!???」

「随分と艶かしい声を出すんですね。
洗っているだけですが何か？」

「べ、別に何も無いって……………はっあああ???」

背中に何かあたる感触がする。

ああ……………何か、意識が……………

「そういえば、先ほどの問いですが、
貴方様のサイズは、人間としては普通だと思いますが」

「? よっし! そっか、そうなのかあッ!? ひ、ひゃああああ
ああああ!?!?!」

「あ……………のぼせちゃいましたかね」

手を泡立てたままの『色欲』の目の前には、
体を紅潮させ、気絶しているアリアの姿があった。

「……………さてと、少し残念ですが、さっさと洗って運ばなければ」

第十一話 温泉風景〜アリア・『色欲』の本性〜（後書き）

ほつんとくに、どうもすいません！
こんな感じになるはずでわ！

第十二話 悪魔変換くアイ対『憤怒』く

「いつてええええ!!!」

「はいはい。我慢してね。 (棒読み)」

「つか『怠惰^{ファウル}』！ お前のせいだろ!？」

俺は、腕や足に開いた浅い傷を手当てしながら、目の前の床で寝転んでる『怠惰』に叫ぶ。

「いや、まあ、傷浅かったからいいじゃん？」

「……ま、まあ、それだけが不幸中の幸い？ ってやつだよ」

喋りながらもまた一つ、腕に付いた傷が塞がる。

まあ、能力『祖体制御』の応用だ。

腕をくつつけた時よりも全然難しくないからな。

「それにしても、その『跳躍者^{ジャンパー}』だけが持つ能力って、便利だよな」

「応用は利くからな。それに、軽くなら治療にも使える。だけど、次は『憤怒^{ツォルン}』だよな？」

「その通りだよ」

『憤怒』が、俺の質問に答えながら、俺の前に立つ。その赤すぎる髪がたなびく。

「あ、よろしく」

傷の治療があらかた終わったので立ち上がる。

「……………まあいい。私は手加減しないからな、全力で来い」

……………やっぱり休みは今のだけなのね。

いつのまにか『怠惰』も離れている『傲慢』の傍で寝てるし。
けど、二人ともやはり手加減してたのか。

「……………魔術は？」

「別に使ってもいいが……………変換が早まっても知らないからな？」

「そりゃ勘弁」

俺は『憤怒』の言葉に対して苦笑しながら、体術の構えをとる。

魔術とは、魔法と同じようで違うもの。

この世界では、人間が外的・内的魔力をつかって発動するのが『魔法』。

悪魔達が使う特殊な魔法を、一般的に『魔術』と言う。

ただし、人間が魔術を使う場合もあれば、悪魔が魔法を使う場合もある。

後者はともかく、前者は魂が砕け散り、消滅するらしいが……………。（
テンプレって何？）

因みに、俺が先ほど『怠惰』との戦いで使った、『アスタロトの視

権』という『魔術』は、

かの有名？な高位の悪魔『アスタロト』が持つ、未来を読む力を一時的に使うものだ。

そう、例えるなら、『私のギスは、未来を（ry』だ。

「考え事は終わったか？」

「ああ、じゃあ、行くぞ！」

外的魔力を纏い、風を纏い、

「光の精霊、我に答えよ。『ライト・ハンダー』」

両腕に光が纏われる。

……手首までが黒い機械の右手、完全に黒くなっている左手。そこに纏われる光。変だな。

「その程度で良いのかお前は？」

「？ まあいい。行くぞッ！」

その瞬間自身の視界は景色を捉えず、目の前には、『憤怒^{ツォルン}』の後頭部。

もらった！！

とはならなかった。

「！！！！」

「おそいぞ？」

俺の光が纏われた左手の拳は、『憤怒』の指一本……
いや、更に言えば、小指の先のみで、防いでいた。

『憤怒』はこちらを見ながら、表情を怒りのそれにして、言う。

「……それに力も、弱い。」

「……やはりお前には、失望する」

第十二話 悪魔変換くアイ対『憤怒』く（後書き）

『ライト・ハンダー』（LIGHT・HANDER）

両腕全体に光を纏い、

硬度・対魔法力その他諸々がアップする。

身体強化系魔法の一部である。

しかし、光属性もあってか、その他の属性よりも効果は高い。

登場人物紹介（話数稼ぎなどでわ！）（前書き）

一応、真剣に作りました。

登場人物紹介（話数稼ぎなどでわ！）

「本話では、？！！？編初期時点での、登場人物の紹介をしていき
たいと思います。

因みに、今話までですので、ご注意を」

「では、皆さんよろしくつ！……アイ兄、後ろに下がって！」

「お、おう？」

アイ・M・ウィルドレース

人間の世界では、伝説と呼ばれている、天・魔の両属性を持っているが、

近頃めつきり出番無し。どうやら作者が調子に乗って最強要素を増やしたかららしい。

超能力『マテリアルコントロール祖体制御』を持ち、物質ならば原子レベルで操作できる。

現在、『世界を纏めし四人』のうち一人、不死身の『メシア救世主』との戦いに備え、

また別の一人、『ディアボロス悪魔の王』達悪魔が住んでいる世界にて修行中。
ディアボロスそして、そこで『悪魔の王』に悪魔変換されてしまい、悪魔になるかもしれない羽目に。

現在、右手一（機械）の手、左腕全体、右足の膝までが侵食され中。

そして、それに伴い、悪魔の使う特殊な魔法、すなわち『魔術』の扱いも可能に。
だが、使いすぎれば、まだ半・悪魔といった感じなので、反動があるよう。

必ずしも、魔術の名前に悪魔の名前が入っている訳ではない。

因みに、よく使う組み合わせは、『強化魔法』『超能力による風の翼』『魔法による属性の翼』
などなど、中二な魔法ばかりだ。（元の世界では中学生なのだが）

アリア・M・ノーヴィス

一度魔力の極度に枯渇する現象が起こり、
その直後、『四人』の一人、『天使の末裔』^{エンジェル}としての片鱗に目覚めたよう。

その魔力は、『悪魔の王』^{ディアボロス}と互角に戦った者と同等のようだ。

現在、『救世主』^{メシア}との戦いに備え、義父に修行をつけてもらう。

得意な魔法は、風属性に水属性。

特に使う武器はナイフ、または短剣だが、それでも足りない場合、水で武器を作るよう。

勿論、アイではないので魔術は使用不可。
もし使えば、天使であろうと吹き飛ばすと予想される。

『デッドリー・シンズ
七つの大罪』

『ディアボロス 悪魔の王』 直属の部下達で、
かの有名な『七つの大罪』と同様。

『アロガンツ 傲慢』、『ファウルハイト 怠惰』、『ツオルン 憤怒』、
『ベギーアデ 色欲』、『ケフレスイカイト 暴食』、『ハーギーア 強欲』、
『アイファーズフト 嫉妬』

の七人がおり、全員が女。

それぞれが人間では届かないような美貌と妖艶さを兼ね備え、
そして『^{ディアボロス}悪魔の王』に仕えられるほどの強さを持つ。

それぞれが、それぞれの大罪の対応悪魔である。

『傲慢』・ルシファー
『怠惰』・ベルフェゴール
『憤怒』・サタン
『色欲』・アスモデウス
『暴食』・ベルゼブブ
『強欲』・マモン
『嫉妬』・レヴィアタン

となっている。

それぞれがそれぞれの『力』を持っている。

アロガンツ
『傲慢』

俺様口調の女。

見た目は、漆黒の恐らく日本人よりも黒い、肩にかかる程度の髪。
そして、超・上から目線な女。因みに目は紅い。
性格がアレだが、けれど美人。

アイとの戦いで見せた攻撃は解明不能。

風になるか、それとも風を操るのかすら分からない。

しかも、攻撃された本人すら遅れて気付く程のスピードと、綺麗な切り方をする。

『傲慢』の『力』は、風。

傲慢な圧政は、民の幸福を風のように飛ばす

ファウルハイト
『怠惰』

髪は肩甲骨辺り、白髪でボッサボサの、
寝癖だらけ。

目はタレ目でいつも眠そう。だが、その目は真紅に輝く。

いかにもメンドい空気を醸し出してる、けれど美少女。

一目で『怠惰』と分かるような体たらく。
他の目をはばかりずに直ぐ寝ようとする。

アイとは多分だが、一番仲が良く、自分をファウルと呼ぶことを許可している。

『怠惰』の『力』は、惰眠。

怠惰な生は、惰眠を貪り朽ちていく

ツォルン
『憤怒』

髪は床にギリギリつかない程度の真っ赤な長髪。
そして端正で、やはり綺麗な容姿をしている。
十人が十人振り返る。

しかし、眼力がものすごく、
その翡翠の相貌に睨まれたら、アイですら恐怖を覚える。

こちらも、言葉遣いが男っぽい。

『憤怒』の『力』は、力。

憤怒によって力を得、そして堕ちる

ヘギアアデ
『色欲』

見た目はとても妖艶。

鎧？つぽいものを着ているが、隠れているのは、
胸と肩としたのほうだけという、実際に見たら何とも言えない。

髪は短く纏めており、色は白。

だが、白と言っても、『怠惰』程白くなく、少し青みがかったいる。

悩ましげな体とは裏腹に、とても生真面目。

その真面目さは、『ディアボロス悪魔の王』すら屈服させる。

今のところ、百合疑惑がある。

『色欲』の『力』は、魅了。

色欲振りまく艶美な舞は、全てを魅了し堕落させる

登場人物紹介（話数稼ぎなどでわ！）（後書き）

はい。読者も少なくなってきたというのに、なぜか続ける私。

だって、この小説って、私が書きたいから書いてるんだ！

はい、ここでビックリなお知らせ。

現在、実はついこの間、私の友達が小説を書き始めました。

彼は東方（知らない人はすみません）の創作小説を書いているので、良かったら探し出して見てやってください。

まあ、私も人のこと言ってる暇ないんですけどね……。

因みに彼、私の小説の題名もユーザーネームも教えてないんですよ。

実は彼が小説書き始めたきっかけが、

私が「小説書いてみれば？」と言ったからなんです……。

第十三話 幕間（前書き）

近頃なんか

第十三話 幕間

「はあああああッ！！！！」

掛け声と共に、相手の深層心理に入り込み、そして幻覚を刷り込む。

そしてまた倒れていく兵士。

これで何人目だろうか？ よく分からない。覚える暇も無い。

数十メートル先では、まるでゲリラ豪雨のように、超局地的な吹雪が起こっていた。
目をこらして見れば、中で少女が舞い、兵士が吹き飛んでいくのが分かる。

そして不思議な事に、その局地吹雪のすぐ横では、多数の兵士が、襲い来る溶岩から逃げている。

「……明、今の情勢は？」

後ろに控えている弟一（今は部下）に、たずねる。

もし敵との戦いが長引くなら、対策を採らねば、またこちらの立場が悪くなる。

「今の所、僕達の戦力のうち、負傷していない三分の二の能力者を投入してるよ。」

そのうち、負傷してるのは未だ10人程度。

前線で僕達、涼風さん、不知火さん。

裏方から来る敵を相手してくれてる荒祇くん、飛驒さんが頑張ってくれてるお陰だよ。

だからこそ、敵の兵士はこれより後につけない訳だし」

「そう……なら良いわ。でも、徹底的に不殺を貫きなさい。
ここで能力者でない相手を殺してしまつては、立場は悪くなるだけよ」

「それは皆、僕も含めて重々承知だよ。

今、確認できただけでも、誰も殺していない。安心して」

「……………」

今、相手側の兵士が撤退していくのが分かる。

銃の弾切れか、または上の命令が分からないが、次々と帰っていく。
地平線ほど向こうに見える、軍のキャンプに。

「撤退！……！」

「はい！」「おうツ！」「分かりました！」「あいよ！」

仲間の能力者達が、それぞれ炎を消したり、水を地面に落としたり、
電気を散らしたりしながら帰ってくる。

「よう。今回も双方、死人がなくて何よりだな」

「飛驒さん……」

飛驒さんは、最初からそこにいたように、私の横に立っている。

「私達もそろそろ疲れてきたよ……。相手は止めてくれないのかな

「？」

琴雪は、能力を使いすぎて疲れている表情をしている。

「もう少し粘れば、向こうから何かアプローチが有るかもしれないわ。」

「それまで待ちましょう」

「もしなかったら？」

「……………こちらから行くしかないでしょ」

私は、佐屋紫は、部下であり友である仲間と、本部に戻っていった。

（アイ……………今日も、がんばったわ。）

貴方は、今の世に戻ってきたら、どうするのかしら？

愛する者の顔を思い浮かべながら、歩いていった。

第十三話 幕間（後書き）

近頃ネタが思いつかない。

しかし、まだまだ主人公には負荷をかけなければいけないので、
（付加ではない）

頑張っていく次第です。

第十四話 修行風景 くアリア対『色欲』なのに

あゝ、何か気持ち良い。

アイ兄、私、何か変な気持ちだよ。

「……………はっ!!?」

最初に視界に映ったのは、『色欲』。

『色欲』は、どうやら寝ている私から見て、すぐ唇がつく直前の状態で、横にいる。

「やっと起きられましたか、『エンジェル天使の末裔』様」

「つてええ！ 何しやがんだよ！」

寝ていた状態から、少し起き上がって後ろに離れる。
すると『色欲』は至極真面目な顔をして、

「何とは、もう訓練をつける時間というのに、
一向に貴女様が起きないので、起こそうと思ひまして」

「え？ 時間？」

……………今思いかえして見れば、私が寝ているのは、草原だった。
勿論、ちゃんと服も着ている。

……………服？

「服、着せたのって…………」

「はい、私です。
色々とその点ではお世話になりました」

今思えば、温泉に入る前と比べて、肌がツルツルテカテカピカピカ
してるような気が……。

あ、ああ！ 温泉の効能に違いない！ そうに違いない！
そう思ってたなきゃ、やってられない！

「あ、そうだ！ 訓練の時間だっけ！？
私は全然大丈夫だからやろうぜ！」

「本当に大丈夫なのですか？」

「ああ！ ……やるかやらないかは別としても、
まずはどいてくれないか？」

「あ、そうですね」

私の上から退散する『色欲』。

「うっうっ……ん……」

立ち上がり、背伸びをすると欠伸がでた。
うん。疲れもないし、すぐにでもやれるな。

「よしっ！

……『ストーミング・ダブル・ブレイド』
外的魔力強化『全身』
『ストーム・ダンス』」

魔力によりできた、水が圧縮されている、一本が脇差程度の双剣を両手に持つ。

そして、外的魔力が全身に染み渡り、更に重複して風が体に纏われ、軽くなっていく。

「もう始めて、良いんだよね？」

すると目の前、少し離れている『色欲』は笑い、良いですよと言う。

「（初期詠唱破棄！）大いなる力、ここに現れん！

……まずは先攻！ 『フリーズ・ブレイク』ッ！」

瞬間、周りの空気が寒くなっていき……

そして、『色欲』の頭上に、氷の塊を作っている。

「なるほど。中々大きいですね。魔力の多さに問題はありませんね」

「余裕だなッ！」

私の上げた手を、下に下げると同時に、直径30m以上ある粗い氷の球は、

『色欲』の立っている場所に落ちた。

ズズズウウウウ……

と、氷の球は地面にめり込む。

しかし、

「手応えは……あるはずない、かッ！」

キン！

と、甲高い金属音を後ろに聴きながら、前に跳び、後ろを振り向きながら背中に動かした左手と双剣を戻す。そこには、既に鉤爪を装着し、臨戦態勢に入っている『色欲』がいた。

「今を防ぐとは、学習したようですね」

「そりゃ何回も沈められてたらなっ！」

魔力と風で強化してある脚力で、一気に相手の懐に飛び込み、

「ハアっ!!」

双剣を次々と繰り出す、が、全てそれを鉤爪で確実に防御していく『色欲』。

「チッ……（初期詠唱破棄）『ウォーター・チェーン』!!」

水で作られた、何メートルもある鎖が、『色欲』の体に巻きつく。

「こんなものが」

『色欲』は、それを破壊しようと力を込める。しかし、

「別にッ、動きを鈍くさせれば！」

私はその隙について、相手の懐に再度飛び込み、双剣で乱舞を繰り出す。

「ウオおおおっッ！！！！！」

そしてその双剣が相手に当たろうかというとき、

ズズズズウウウ！！！！！！！！！！

大きな地震が、私達を襲った。

「うおっ！！？」

体勢を崩した。

しかし、倒れる直前に、既に鎖を壊した『色欲』に支えられた。

「何だってんだ！？」

『色欲』に話しかけるが、何も答えない。
何か事情でもあんのか？

しかし、帰ってくるのは無言だけだった。

第十四話 修行風景 くアリア対『色欲』なのに、（後書き）

何か近頃アリアのイイとこないっすね。

第十五話 悪魔変換
くアイ・完全変換く

「がっ！？ あ、あ、あああああ！！！！？？？」

「私はファウル程甘くないぞ！」

畜生……折られた……。

多分、この痛みはアバラ数本イッてるな。
冷静でいれるのも前の世界の経験か？

しかし何なんだアレは？

額にデコピンされたと思うと頭蓋骨が揺さぶられて気持ちわりいし、ただ蹴られただけと思つたら壁に叩きつけられて、骨も一部イッてるし。

「くそッ！ 憤怒は力」とはよく言ったものだヨッ！！」

起き上がった、**「憤怒」**に突風を送った。

が、

「邪魔だ」

『憤怒』が手を、腕を空中で無作為に振つただけで、まるでただの埃を払うかのような動作で、突風はブオオオオッ！！と音を立てて、まったく別の方向に受け流される。

そしてその隙で、

「なッ！！！？？」

いつのまにか、また目の前には、『憤怒』がいた。

「これで、終わりだ」

至極冷静な口調で腕を振り上げ、

『憤怒』のその右手が、俺の懐に入ったその瞬間、

ゴギギイギギメギツギギギギツツツツ！！！！！！！！

この世のものとは思えない音が外に漏れ、痛みが体を襲う。

かなりの激痛だった悪魔変換の黒いモノの進行も、これに比べたら

……

「ツツアアああアアあああ！！！？！？！？！？」

体の内側から弾ける感触。

視界に入る、自身の体から突き出す白いもの。

そして喉の奥からでてくる鉄臭いもの。

気付けば俺は、『憤怒』のいる場所から何メートルも離れた壁に、背を持たれかけていた。

後ろからは瓦礫の感触がする。どうやらまた、吹っ飛ばされたりしない。

……それでも、意識が飛ばないってのは、逆に辛いな……………。

第十五話 悪魔変換 ｾﾞアイ・完全変換 ｾﾞ(後書き)

今回は叫び系が多くて楽……ゴホンゲフンっ！

ついに悪魔になりますなります！

感想、または誤字訂正報告よろしくお願いします！

第十六話　『哀』対『傲慢』　『怠惰』　『憤怒』

ああ……した……い……。

周りは、気付けば闇だった。

真つ暗闇。光の無い世界。でもなぜか、自分だけははっきりと、確実に見えていた。

ああ……したい……。

何を？　何で？

自分の声であるはずの、だが他人の声であるようなソレは、まるで壊れたラジオのように、ノイズが邪魔をしてよく聞こえない。

「……した。　したい。」

……したい。　……したい……したい！」

そして気付けば、俺は自分で、ノイズの混じった声を発していた。俺は……どうした？

確か、世界を渡って、『救世主』と戦う事実、世界の『意思』を教えられ、

それで、それで？

それでどうした？

俺は、何の為に帰ろうとした？　世界？

……否。帰る、とは何処に？　何で？

世界の『意思』？　『救世主』？　そんなもの知らない。

「気のせいでは無いだろう。」

コイツの象徴は殺人欲なのだろう。そんな悪魔聞いたことも無いがな」

「何にせよ、我々が『悪魔の王』ディアボロス様に命を受けたのは、

コイツを悪魔変換を進行させながら痛めつける事だけだ。後の指示はコイツを動けなくさせてから求めるしかないか！」

好き勝手言っな。

……こいつ等、誰だっけ？

………そんなの、どうでも良いか。声が出せなくても、変わりはないし。

それより、早くこの、ムズムズして、イライラして、ウズウズする感覚を止めたい！

何でも良いから、傷つけたい壊したい殺したい！！！！

「d f f l k s d j f l d s k j f l d s 殺 f g l k d s j s j k
l 殺！！！！！！」

足に力を込めて、飛び出す。

まずは、白髪のカギ。

「アレ？ 私くんの？ やだなあ、アロ姉かツオルンのところ行ってよ」

「「おい」」

白髪のカギに左手をかざす。

まるで一連の動作が体に染み付いてるよう。

魔力？がその手の先に集まってる気がする。

「……D a n t a l i o n………j f d s j l j f l l……」

「はっ!？」

ガキが呆ける。……もう遅い？

その瞬間、白髪のがきの場所が、俺の魔力?で吹き飛んだ。跡形も無く、だ。

第十六話 〱『哀』対『傲慢』『怠惰』『憤怒』〱（後書き）

さあさあ！

これから真性のバトルパートに移っていきます！

「また来るぞ！」

赤髪の女が叫ぶ。

今度は体全体の前面。目の前に魔力？が収束していく？

< g j s k d g f f r p d g ! ! ! f s d f g g r d . , m d s :

L

瞬間、赤い血のような閃光がほとばしる。
今度こそ、と思ったが、

俺が思うよりあいつ等はしぶといようだ。

三人とも、うまく閃光を避けるのが見えた。

g d j s l k j l s j f l s j f s d f l ! ! ! ! ! ! ! ! ! !
[!

「まずいな。こいつ、魔力量自体は俺様の方が段違いで上だが、い
かんせん一度の魔術威力が高すぎる。」

俺様としたことが、アイツの実力を見誤ったか？」

「フツ……今になって弱気発言か？ いやそれとも、相手の過大評価か？」

「「「『**悪魔の王**』様!!!」」」

三人？が声を揃えて言う。

なんだ？ あの三人も三人だが、コイツは桁違いだ？

黒い服に身を包んだ白い子供？

「f・あ s j f・ふ f・s ! ! ? ? ? ? ?」

「言葉すら満足に喋れんか。」

しかし、どうした『跳躍者』？ お前の実力はその程度か？
それとも、我との戦いを忘れたかわけではあるまい？」

「ツ！！？！？！？！？！」

... ? ? ?

俺は……？ コイツと、戦った？ 事が、ある？

! ? ! ? ! ? ! ? ? ? ? ?

「あ……あゝあゝ！？」

「フツ……覚えているか」

あ？ fじゃpf・だjcf・だ；s！？！？？！？
止める、止めるオ！！！！！！！！！！！！！！

その瞬間、

鉄格子の扉を勢いよく開け、そこから入ってきた女を、見た。

「アイ兄!!!」

「…………あ…………gふあsk・え・lkfdさmvAf@owjfa!
?????????」

何? 何を覚えてる?

覚えてないけど、覚えてる。

どうでも、居は尾dhさふあえ・g:!?
——!!!

「あ……………」

その瞬間、視界は反転した。
そして、

『静寂』

視界は一転、暗闇であり、光の差す、

「ここ、どこだ?」

第十七話 『哀』と『天使』（後書き）

実は明日からテスト。
それも、中間。

これで良い成績出さなければ、家・学校共々『アーーッ!..!』な事になります。

ですが、私は投稿を続けます。

だって、毎日投稿って言ったから。（本当に一番最初に）

第十八話 『天使』が会う『哀』

アリアSIDE

「なあ、何が起こってるんだよ」

「……………」

ベギアデ
『色欲』はまだ喋ってくれない。
すると、

「ッ！ 『悪魔の王』！！」
ディアボロス

いきなり目の前に現れた 少年。
いや、ただの少年じゃないことくらい知ってる。

ベギアデ
「『色欲』！」

「はっ！」

ディアボロス
『色欲』は『悪魔の王』を前にひざまずく。

……キャラが違うのは置いとく。
それよりも今は！

ディアボロス
「『悪魔の王』！！ 一体何が起こってるんだよ！？」

エンジェル
「『天使の末裔』か……。」
そうだな、一言で言えば、『ジャンパー
跳躍者』が関係している」

アイ兄が？

どういふことなんだよ！

「お前らのせいなのか？」

「……これから述べる事は事実だ。だが、それを聞いても落ち着け。分かったな？」

何のことが分らないが、うなづく。

すると『^{ディアボロス}悪魔の王』は淡々と事実を述べていった。

アイ兄の修行の最初に、『^{ディアボロス}悪魔の王』は一度、アイ兄を殺し、そして悪魔変換を強要した。

更には、『^{デッドリー・シンズ}七つの大罪』の、『傲慢』、『怠惰』、『憤怒』をアイ兄の悪魔変換を早めるために戦わせたこと。

全部が全部、修行とは言えない内容だった。

「ッ……！ ふざけるな！ 何でそんな事したんだよ！」

「……我は、信じていたのだよ。『^{ジャンパー}跳躍者』ならば、決して悪魔には、

飲み込まれない精神を持っているだろうと。それに、そこまで進行が早くなるとは……すまない」

「……！」

いつもとは違い、その様子は、自分のやった事に対する謝罪の姿勢のみだった。

そう。『ディアボロス悪魔の王』もアイ兄を認めているだけなのだ。
多分、今回はソレが過ぎただけだ……………と、思う。

「もう、良いよ！ それより、早くアイ兄を元に戻すぞ！
方法は！？」

「『ジャンパー跳躍者』自身の意識を、覚醒させるだけだ。

通常、悪魔変換とは、その元となる生物の精神の影を、悪魔として
昇華させ、ソレを表層意識に持つていくだけだ。

だからと言って、ソレを殺しても、元の人間も死ぬだけだ。
なので、既に悪魔となった相手の元の精神を表層に持つてこさせる
ために、覚醒させるだけだ」

『ディアボロス悪魔の王』は、つま先で地面を叩きながら説明する。

「……………なら、私にできるのは……………」

「そう。我と同じ、奴の精神を刺激する言葉を連発してやれ。
仮にも妹なのだろう？ それなら、ああいう思い出の一つや二つあ
るだろう？」

我には戦いくさしか印象に残っていないがな」

「ああいう思い出って何だよ！」

「……………我は先に行く。
『ベギアテ色欲』。『エンジェル天使の末裔』を後から連れて来い」

「はい。分かりました」

するとまた一度、大きな地震がこの草原全体。いや、もっと広い場

所に行き渡る。

そして、その揺れと同時に、

『ディアボロス悪魔の王』は、その場から消えた。

「『色欲』！！ 早くよろしく！」

「分かっていますよ」

『色欲』は、おもむろに私に近づくと、

ギュっと、私を抱きしめた。

「こんな時に何やってんだよ！」

ああ、何か柔らかいモノが当たる。

「いえ、危ないので。

……………では、いきます！」

『色欲』のつま先が、その揺れている地面に当たる。

その瞬間、視界は一転し、鉄格子の扉の前に、立っていた。

そして奥に見える、兄。

アイ兄は、もう見る影も無いほどに、変化していた。

体全体が黒い何かで覆われていて、ソレが無いのは、なぜか右手だけだった。

しかし、それでもその物体は常にうごめき、不気味さをかもし出していた。

そして顔の部分には、既に顔、という物は無く、代わりに黄色い光る相貌がポツポツと淡い光を放っていた。

その時、私は『色欲』の静止を背中に聞きながら、咄嗟に扉を開けて飛び出した。

「アイ兄!!!」

第十九話 アイの目覚め、『禁忌』と『神気』

「……アイ兄……！！……アイ兄！！！！」

「うおッ！！？？」

その声で起きる。

この世界で会い、そして何度も聞いた妹の声。

「あ……」

「何だ？ 何か用か？」

「あ、アイ兄の、バカヤロォー……！！！！」

「そげぶツ？！？！？」

瞬間、刹那のタイミングで懷に突進してきたアリア。
……今のは効いた。

「ずっと、しんぱ……して……た……」

「……泣いてるのか？」

妹の体はビクツとして、そして顔をあげる。
……やっぱ妹だな。

「……ちいッ……」

顔全体を真っ赤にした後、

「ほぐふうツツ!!?」

殴られた。腹を。めっちゃ痛い。

しばらく悶えていると、妹が離れるのを感じた。

改めて感じる自分の体の感覚。

首とか関節が痛い。ずっと眠ってたみたいに。

……やっぱりそうか。

周りを見れば、自分が此処にどれ程の被害を与えたが分かる。

俺は、冷たい石の床……では無く、

ベッドその床に一つポツンと置かれた簡素な木のベッドに寝ていた。起きて床に立ち上がる際、腰が痛かったのは気にしないでおく。

服は、元の世界の病院着のコチラ版みたいなもので、簡素だった。

「……そこに居るんだろ『ディアボロス悪魔の王』?」

「……………その様子だと無事のような。よく舞い戻ったな我が好敵手」

石の床を歩いてこちらに来る『ディアボロス悪魔の王』。
その足音は壁に響き、そして跳ね返る。

「アイ兄……………」

心配そうにこちらを見るアリア。

まったく、妹にこんな顔させるなんて何やってんだか。
いや、俺が変わっただけか？ ……ま、良いか。

「大丈夫だよ。それに、もう自重しろ王」

「王は努力するものでは無い。今すぐ止めるさこんな事は。
……それより、今が何日目か分かるか？」

そう。ソレが重要。

俺は、『ディアボロス悪魔の王』を恨んでる訳じゃない。

元々、敵を殺すための修行だ。
それに……

「もう、結構俺は寝てたのか……??
アリア、お前の魔力、もう俺に届きそうだ」

「え！？ べ、別にそこまで強くないッ！！?
アイ兄の方が強いだろ！」

まったく、この世界はどれだけ規格外を量産したいんだよ。
これも……『意思』か。

「その様子だと、大体分かっているようだな。
……今日は、『753日目』だ。『ジャンパー跳躍者』」

「そうか。もうそんなに……」

まずいな。これは予想外だ……。
そこまで時間が経つのが早かったか。こ……この世界は。

「……心配かけたな、アリア。修行、頑張ってるんだな」

「……………バカヤロツ!!」

何だ？ また顔真つ赤にして後ろ向いちまった。
??よく分らん。

すると、また鉄格子の扉が開く。

「よう。ひさしぶりだな」

「！ マスター!! 久しぶりです!!」

一瞬誰？ と思ったが……そうだった。マスターだった。

「マスターがアリアの修行つけてくれたんですか。ありがとうございます」

「いやいや、私は何もしていない。全てアリアの望みだ。

……それに、私ももう出番など無い。これからはお前達の時代だな」

「は？ 何と？」

「いや、なんでも無い」

なんだっただんだ今の？ ……まあ良いか。

「話は終わったか？」

「ああ」

「そうか。……少し気になるのだが、良いか？」

「何だ？」

「『ジャンパー
跳躍者』、お前。何してきた？」

「……はあ……やっぱバレるか」

「しょうがない。話すか。」

「……全てを。」

第十九話 アイの目覚め、『禁忌』と『神気』（後書き）

サブタイの『禁忌』と『神気』については次話で。

感想、または誤字訂正がありましたらドシドシお願いします。

第二十話 アイの説明（キャラ壊れ中）（前書き）

はい。やっと中間テストが終わったっす。
いや、本当長かったなあ……。

『ノートウングモデルだおッ!!?』（特に意味は無いはず）

第二十話 アイの説明（キャラ壊れ中）

「俺は、悪魔だ」

「!?!」

「え？ 何言ってるんのアイ兄？」

「……やはり、『ジャンパー跳躍者』から漂うこの気配。
悪魔のものか」

『ディアボロス悪魔の王』は気付いてたみたいだな。

「安心しろよアリア。俺は俺だ。お前の事も全部覚えてるよ。スリ
ーサイ「おらあっ!!」ほげへふッ?!?」

いきなり腹にとび蹴りを入れられた。
不意打ちだったから良く効いたぞ今のは。

「はぁーはぁー、ふう。……何言ってるんだ!?!」

「いや、どれだけお前を知ってるかって「勘違いされる!?!」ぐ
ぼっ!?!?」

おいおい。今のは顔面にめり込んだよ。悪魔の体に強化無し体術で
なんでダメージを!!

……そろそろキャラ戻るか。

「そろそろ本題に入るか「最初からそうしろッ!?!」」

「俺は、悪魔。これは何の間違いも含んじやいない本当の事実だ。そして、それと同時に人間でもある」

「……良く分からないな」

「ま、そうだろうな。実際のトコ、俺自身よく分からない事だらけだ。

だが、お前は何か知ってるんじゃないのか？ 『ディアボロス悪魔の王』？」

その例の王に話を振る。が、

「知らんよ」

「即答かよ！！……参ったね。まあ、俺が知ってる事だけ話す。

俺は、あの時……って言うても結構経ってるんだっけか？

まあ、とにかくあの時、『ディアボロス悪魔の王』とアリアに呼びかけられた時、俺の表層意識は覚醒したよ。それも、はっきりと確実なものとしてだが、俺は止まらなかった。……そうなんだろ？」

「……ああ。あの後も、数十日間ずっと暴れていたよ。

まあ、『デッドリー・シンズ七つの大罪』総出で押さえ込んだが」

「そうだ。俺の意識は確かに存在していた。だが、それも意味は為さなかったって訳だ」

「どういうことだ？」

アリアは首を傾げ、疑問の声を発する。

まあ、普通そうだろう。なぜ意識が戻ったのに、体は暴れたままだったのか。

「……………」『悪魔の王』。お前は悪魔変換の原理は知ってるよな？」

『ディアボロス 悪魔の王』はさも当然だというように声を張り上げる。

「勿論だ。悪魔変換は、対象の影の感情を昇華、悪魔にして元の意識を刈り取らせるもの。

………… ツツ！！ そういう事か！！」

「そ、大当たり。つまりは、…………さて、ここで質問。俺の悪魔の象徴した感情、または行動は、

『殺人欲・殺人衝動』で良いんだな？」

「その通りだ。我の部下で一際優秀な『傲慢』^{アロガンツ}がそう分析していた」

ああ、アイツか。あの俺様口調のフィアンマ野郎。…………野郎じゃないか。

とにかく、同じ悪魔には筒抜けだったって訳だ。

「そして、アリア。俺の何が悪魔の意識になったと思う？」

「…………?? ……………えと、その感情？」

ああ！！！！ そういう事か！！！！」

アリアが納得したように手を叩く。もう良いだろ。

「つまりは、『俺自身』の意識が覚醒していても、その時は悪魔。そして、悪魔の意識は象徴の感情。つまりは『殺人欲』だ。

簡単に言えば、俺自身の意識があつたとしても、悪魔の状態での思考、活動は全部『殺人欲』任せなんだよ。
つまり、俺だけをぶちのめしても、意味無いんだよ」

二人とも納得したようだ。……『ディアボロス悪魔の王』、お前はソレで良いのか！？

それはともかく

「それで俺は、奴の活動が弱まった頃、つまりお前らが悪魔の俺を押さえ込んだ時だと思うが。

その時に、思考内、つまりは見えない戦いをしたって訳だ。これも『殺人欲』でしか動いてない悪魔だからできたことだ。

……ぶっちゃけ、『思考内で会えないかな！』って言うてたら会えた訳だが」

二人とも驚いている。ま、意外と簡単だったからな。

「そ、それでどうしたの？」

「ああ、そこで……」

「「そこで……？？」」

アリアはゴクンと唾を飲みこむ音が聞こえ、『ディアボロス悪魔の王』は、真剣な表情で聞き逃すものかって感じになっている。

「いきなりバトルパートになったんだ。ま、相手は『殺人欲・殺人衝動』だからな」

「「なんなんだよ！！」」

おうッ!?!? ハモッてる。……『ディアボロス悪魔の王』、キャラ壊れてる壊れてる。

第二十話 アイの説明（キャラ壊れ中）（後書き）

はい。前書きでも書いていた通り、中間テスト終わりました。そして私のゲーム・pc廃人生活も終わりを告げる気がする。

そんなことはともかく、実は私、

『テスト前には絶対に『喜・楽』テンションをminにする』んですよ、なんとなく。

その為のものとして、実はテストが全三日間だったのですが、その前日でも勉強せず、三日間の前日全部、『ひぐらし』を見て泣いて、

『スクイズ』（アニメの方）を見て鬱になってテストに参戦しました。

その結果、惨敗。テスト中『スクイズ』（アニメ）のラストを思い出したり、

『鮮血の結末』を思い出したり、HQの『轢殺』を思い出したり、『you』を脳内で口ずさんだり、『リテイク』を脳内再生してました。

はい、すみませんでした。

世界エ……

誠氏ね。

言葉様！！

圭ーいいいい！！

かな？ かな？

あ
う
あ
う

第二十一話 思考での決戦

「俺は、思考内。何でそこで意識を保てたかは分からない。

もしかしたらこれも『四人』が関わるのかも知れないが……兎に角、ソコで戦ったんだ。

俺と、な。それも、相手は殺人欲の塊で、しかも悪魔。

魔力量的にも、力でも、魔法だって、俺自身は魔術なんて代物扱えるわけではない。

全体的に無謀だって分かってて、戦ったんだ」

「何でそんな事したんだよ！！ もしソコでアイ兄の意識が完全に死んだら、一生ッ……！！！！」

静かに話を聴いていたアリアは突然声を張り上げる。

『ディアボロス悪魔の王』は静観している。

「……そこで、俺は戦った。その時の事でも、話そうか………」

「……………」

〈回想〉

アイ、思考内にて。

「…………お前が…………オマエだよ…………そうか」

今、目の前にいる物体。いや、人の形をした黒い塊。
粘液のようで、液体みたいで、でも固まっている変なもの。
だがその形だけは、見覚えのあるものだった。

「本当にソックリ……………っていうか同じ原型か」

『当たり前だ。俺はオマエ、オマエは俺だ。』

…………今だってオマエの中の殺人欲が、黒く滾^{たぎ}っているのが分かるだ
ろ？

俺はオマエを殺したいし、オマエは俺を殺したいだろ？ 当たり前
だ。だって……………』

「『俺は俺だから』」

その言葉が、合図となった。話などいらない。
瞬間、目の前で迸る青い閃光。

「ふっ……………ッ！……！」

『ハハハはは！……！』

そして覆いかぶさる炎、水、さらには雷。
まるでどっかの三流ファンタジーだッ！

「（詠唱破棄……！）『ブラックファンタジア』」

『G l a s s y - L a b o r a t o r y ……『透過』』

「なっ！！！！」

俺の左手から奔る黒い奔流は俺に向かう。が、唐突に掻き消える姿。

『S a r g a t a n a s 『移動』』

突如、背後から聞こえる声。咄嗟に振り返るが……その判断は……

（まずいッ！？ さっきのは『透過』、なら今は……）

「ぐっぎッッ？！？！？」

後ろに振り返った瞬間、更に背後から何かが当たった。

「んだッこりゃ！？」

ジジジ……と音がして、背中に何か熱い感覚が起こる。

『..... V e p a r 『不治』』

背中から流れる熱いもの。そしてソレを感じるたび、体に悪寒が奔る。

……さっきのが『移動』、『透過』。そして今は……『不治』。背中から流れて止まらない血。傷口はそこまで広くないのに、流れる続ける理由は、
そうか、これも魔術か。

「全くよオ！！ さっきから魔術ばっかだなア！？」

『魔術とは自分よりも下の位の悪魔の力を一時的に謙譲させるもの。これだけは感謝するぞ俺。オマエの殺人欲は中々高位の悪魔になった……とな』

なるほどね。

魔術については悪魔が使う特別な、人間には仕えない魔法だとか知らなかったけど……。

そういう原理か。だとしたら、ソロモン七十二柱に当てはめたとしたら結構な位か？ 知らないが。

それにしても、俺。殺人欲になった瞬間キャラ変わり過ぎだったの。

『さて、ここでオマエを殺せば……晴れてこの体は俺のものになるわけだが……』

ゆっくりと、実は片膝ついてる俺に歩いてくる俺。……ややこしい。やば……そろそろ血が足りなくなり……そうだぜ。

「……それは勘弁………」

右手の布を、外す。

中に見えるは鋼の光沢。

一撃で決めなきや後がねえ。これで決めなきや気絶する……。

「……………その、余裕を、ぶち壊して……やるよっツツ……！」

キュイイイと駆動音を発する右腕。

右肩後ろにある噴射口から感じる淡い光。

『……………?? 金属?』

「俺の事も、少しは知っとけ!!!」

瞬間、淡い光は魔法に劣らない炎となり、そしてその計算されつくした推進力は、俺の体をアイツに持っていった。

「今そこに行くぞオオオオ!!!!!!」

第二十一話 思考での決戦（後書き）

はい、始めました。アイと悪魔の戦い。

一応、殺人欲の例のアレは、『七つの大罪』の対応悪魔よりは下の位なので、

あの七人の悪魔の力は使いません、あしからず。

さて、ここで悪魔解説コーナー

（読者にも悪魔の権能を知って欲しいから。wikiだけど）

・ Glas ya - Labo las（グラシャ ラボラス）

召喚されると、グリフォンのごとき翼を持った犬の姿で現れるという。人文科学の知識を与える一方で、殺戮の達人でもある。過去と未来のことをよく知り、また、人を透明にする力も持っている。

サルガタナス

・ Sar ga ta na s

数旅団の精霊を率いており、直属の配下としてゾレイ、ウアレファル、ファライーを従える。人の姿を見えなくする力を持つ。また、人をあらゆる場所に移動させる力、あらゆる鍵を開け、家の中で起こっていることを見せる力も持つ。羊飼いの技も教えてくれる。

ヴェバル

・ Ve pa r

人魚の姿で現れるとされる。その力は水域を支配し、武器弾薬を満載した武装船団を誘導できる。また召喚者の求めに応じ、海に大嵐を巻き起こしたり、船団の幻を出現させることができる。人の傷口を化膿させて蛆をわけ、三日で死に至らしめることもできるという。『悪魔の偽王国』によると逆にその傷を直ちに癒すこともできるとされる。

第二十二話 思考での決戦 - ?

「抹殺のオオオオ!! ラストブリッドッオオオオオ!!!!」
「」

肩の後ろから来る莫大な推進力を上手くいなしながらも、
ソレを糧に相手の懐に、突っ込む!!

『ぐッ!? このッ!!』

ジェット噴射と同等ほどの推進力を受けた機械の右腕は、その莫大な衝撃に耐えながらも、
そのままソイツの顔面に、入った。

が、相手はソレをこらえ、足から摩擦熱による少量の煙を出しながらも、

倒れずに後ろへ下がっていく。

「チッ!! な、らアッ!!」

ダダダダダダダ!!!!

よく映画で聞くような機関銃の銃声が辺りに響く。

.....とはいっても、周り一面のつぺりとした空間が広がるだけで、
壁などはないはずだが。

そして後一点、訂正がある。

この銃声は映画などではなく、本物の全自動機関銃フルオートである事。

しかも、その一秒間に何発発射されるかも、肉眼では分からぬ凶弾は、

更にその向かい側に居る『悪魔』に向かう。

「くらえやあああ、あ、あ、！！！！！！」

大体こういうの効かないかと思ってるだろ！？

そんな訳あるか！ 悪魔だって人間と同じなんだよッ！！

『ぐッッ！！？』

機関銃の不意打ちで仰け反る相手。

そしてその隙で……

「次はコレだッ！！」

ガコン、と機械の駆動音＋何かがズレる音がし、
そして次の瞬間、

『な、何だッ！？！？』

困惑の表情を浮かべる悪魔。

だが、そんな表情も既に煙の中に掻き消える。

どうやら俺の殺人欲も、機械は知らないか。……悪魔に知識がある
のかも分からないが。

今放ったのは、ミサイル。

たった一発あったアレは、昔『遺跡』に行った時に使ったが、
アレともまた別に、バズーカを発見していた。この世界に来てから
時間があつたお陰だが。

最後に撃ったバズーカ砲も、一応手応えはあつた。

だが、さっきはああ言ったものの、本当に『悪魔』という規格外の代物に通用するのか知れない。

「やば……血が足りねえ………」

そろそろ立ちくらみも酷くなる。

これで、倒せてなかったら俺死ぬな。

未だに、機械の右腕を使っていた時でさえ流血し続ける背中。

これはもうどうしようも無い。魔術で『不治』を付与されたのだ。塞いでもずっと少しの瘡蓋かさぶたさえ張らない。いや、根本的に血が固まらない。

「あ………も、ムリ………」

最後、まぶたがとても重く、遂に耐え切れずにソレを閉じた際、視界の煙の端で、己自身の姿が見えた……気が、した。

「……ん？」

次に目を覚ましたのは、

「……は………思考内？」

どうやら例の思考内世界にて寝てしまったようだ。……思考内で寝るとは、恐るべし。

周りのはのっぺりとして、殺風景で何も無い空間。すぐそこに壁がありそうだし、同時にもっと向こうにある気もする。

『起きたか』

「ツツ!?? うおアツ!?!?!? 殺人欲!?!」

突如後ろから降りかかった殺人欲。つまりは先ほど?まで戦っていた者の声。

そこには、黒い塊が少しだけ残っている、俺が居た。

振り返れば奴がいる。……古いな。

『……全く、俺は俺、オマエはオマエ。俺はオマエでオマエは俺。とは、良く言ったモノだな』

「は?」

『……お前、もし先ほどまで殺し合いしてた相手が居るとして、その相手が傷ついてたら、お前どうする?』

いきなりだ。唐突だ。訳分からん。

つまりなんだ? またまた和解パターンっすか? はい。

……俺は和解するのが早い、とは言わない。
空気読んで。

「そりゃ、手当てする。……もし俺以外に危害を加えたら、別だが」

一瞬、脳裏に自分の恋人、そして友。そしてその大切な者に手を出す『HC-R』が見える。

……あいつらは許せない。

『即答するな。……つまり、いくら俺が殺人欲の塊だろうと、お前の『影』だろうが、俺はオマエって事。つまり、オマエはしたい事は俺がする。』

……ただ……やはり俺は、オマエを殺す。』

「！？ テメエ……やっぱ和解できねえな。手当て感謝するが、これだけは譲れない」

『くくくッ！ そういうトコがアレなんだよ『素体^{オレ}』！！』

その外見、性格からは計り知れないその『殺人欲』！ オマエの『影』！！』

最ッッ高だアア！！！ オマエのソレが、俺を強くする！ 俺のモノだソレは！！』

……すみません。和解パートじゃ無い。

第二十二話 思考での決戦 - ? (後書き)

そんなに簡単に和解するわけじゃないっすよ。
だって己と己の殺人欲ですもの。

第二十三話 お前は、殺人欲なのか？

目の前で、どんな生き物でさえ格下に見えてくるヤツがいる。
俺の影、いわゆる殺人欲らしいが……

本当にコイツは、『殺人欲』なの悪魔なのか？

という疑問を、現在お抱え中である。

なぜか？ それは簡単。だってなぜか治療？してくれた……と思うから。

もし、本当に殺人欲・殺人衝動しかない悪魔ならば、なぜ俺を治療した？

別に治療しなくとも殺せただろう。苦しむ様を見たいだけなら、なぜ起こさなかったのだろう？

色々で様々な疑問は、その口から出る前に弾ける。

……もしかしたらコイツは。

「……お前、……どうしてそこまで俺を欲しがる？」

『……………何だ？ 何のことだオマエ？』

動揺している……。

「俺を、何故殺さない？」

『何を言っている？ 俺はオマエを殺したくてウズウズし「嘘を吐け」……………』

「……殺せないか」

ビクツと体を震えさせる俺自身。

「殺人欲なのかお前は。……俺は………殺人欲など………」

そう。最初にコイツに会ってからずっと言いたかった。

コイツが影なら、俺はソレが抜けた人間？ おかしいだろう。

「お前は、殺人欲じゃない。

『そんなこ「お前の本当にしたい欲・衝動。それは……

相手が無抵抗でもダメ。無感情でもダメ。意識不明でもダメ。
そんなの、殺人じゃない。

まるで、まるでお前のやっている事は………

ただの、おあそび戦闘だ」

そう。

コイツは、殺人欲なのにまるで俺を殺そうとしない。

確かに致死性の攻撃ばかりだったが、その実、俺を一瞬で圧倒的に
殺せられるモノなんて、

一切使わない。

そんなの、殺人じゃない。

「お前は、おあそび戦闘がしたい？ ほんばん殺人じゃなくて？

だったら何でお前はそんなに………殺せない？」

『俺は……俺は、俺はアアアア……！』

俺は悪魔だ！ 殺人欲の悪魔だ！ 俺はお前を殺す！ 絶対に、ブ

チ殺してやる！――！』

その黒い中から、殺気漂う視線を感じた……ような気がした。

「それが……お前の言こたえい訳か。俺」

第二十三話 お前は、殺人欲なのか？（後書き）

作者による第二回悪魔講義。例によってwikiでも良い。

ダンタリオン
・Dantalion

無数の老若男女の顔を持った存在として描かれており、手には書物を持つている事が多い。あらゆる芸術と科学に関する知識を教えてくれる他、人間の心を読み取るのも上手く、他人の心の内もの確に教えてくれる。愛を燃え立たせる力、および、望む場所に幻覚を送り込む力を持つ。

メフィストフェレス
・Mephistopheles

空飛ぶ魔神と呼ばれ、天文学・占星術・気象学に長けている。その姿はグリフォン、あるいはドラゴンに似ているという。また、黒い毛に覆われているともいう。老人、あるいは紳士の姿で現れることもある。地獄の炎と幻を操り2匹のドラゴンのひく馬車に乗っている時もある。狂える殺人鬼にもなれば、見えないところから人間を誘惑し悪徳へと導こうとする地獄の大公である。しかし、メフィストフェレスに殺された人や悪徳へ導かれた者は共通してなにかしらの罪を犯していたり、悪い考えを持つ者ばかりだったという、生前に己も罪を犯しておきながら地獄への死者を審判するというなんともおかしい悪魔である。

しかしながら、地獄に堕ちたことを後悔しており、努力次第で天界に行ける人間をうらやましがっているとされ、最後の審判に許されて天界に戻る日を待ち望んでいるという。

こんなところです。

第二十四話 …… 和解？じゃないよな

コイツは殺人欲じゃない。俺を殺せない。
それが分かってても、コイツの殺気は肌にチリチリと焼けるような感
覚を与えるし、

戦い方もどうやら本気を出しているようだ。
バトルジャンキー
戦闘狂じゃなかるうか？ いや、きっとそうだろう。

アイツは殺人欲ではない。

でも、俺と戦う事に何の躊躇も無い。殺気も出せる。

ならば後は、コイツを屈服させ、俺が表層意識に出れば良いだけ。

……………

って、考えてた時もありますた。

「……………いてえ」

『痛い……。心が（笑）』

キャラ崩壊してませんか悪魔？

視界が真横になっている俺の隣に仰向けで倒れている悪魔。

「『四人』の力舐めんな。

それに、これは俺の勝ちだ。この体は俺のモノ。俺が司る^{つかさど}」

互いの戦闘の結果を、俺の影が悪魔になった、『戦闘狂』の悪魔に言う。

『俺はお前を殺したいから。だから今は勘弁しといてやる。
今殺したらこれからの楽しみが無くなる。……もう少し遊んでから殺す』

「おうおう。そんなに殺気出しちまって。
というかいつからコレこんなにはのぼのぼの空気になってる訳だ？
これじゃ読者が減る一方なのは『それ以上言ってやるな、俺』」

結果だけ言う。
俺は、勝った。

悪魔が使うのは、魔力任せの効果丸分かり魔術だけ。
何回も戦えば、そのパターンが染み付いていくのは必然だった。
それでも、魔法と超能力、体術のみで押さえつけるのは難しかった。

そして、本人に諭した。

「お前は殺人欲なんかじゃない。お前は戦闘狂。哀れで悲惨な俺の成れの果て」

思考内で出会えたのは当に天文学的数値だったのだろうか？
それとも……忌まわしき『四人』の力か？ それは分からない。
だが、悪魔に勝った。自分の影に打ち勝った。……今はソレだけで良い。

「……俺は悪魔なのか？」

質問した。倒れている俺自身に。俺の複製に。

『……………そう、だ。』

いくらお前の精神が人間のまま、悪魔の意識を地の果てに落としても、肉体は悪魔だ。

もう既に変換された人では無い化け物。

しかし面白いな！！　くくくッ！　いくら素体でもこれなら反応すると思っただけにな。

当に我が主に相応しい！！』

「……主？」

聞きなれない言葉に耳を貸す。

主とは何か？　……………大体予想はつくが。……………また面倒な設定が増えるようだ。

『そうだ。お前は肉体が悪魔でも精神は人間。お前単独では『魔術』は使えない。

だが、俺は悪魔。お前の影。影と本体だから愛称は良くも悪くも抜群だ。

そこで、『魔術』を使う時には、俺が表層に出て代わりに使ってやるうと思っただけだ』

「……………そのまま乗っ取るつもりか？」

『そんなことは無い。結局は精神が強硬な方が勝つからな。今更、お前を殺しはしない限り、俺が表層意識に出る事はない』

「お前はソレで良いのか？ 暇じゃないのか？
いくら殺人欲じゃなくとも、戦闘狂なんだし戦いたいだろう？」

ずつと襲われて、本当に殺されかけた俺が言うのもなんだが。
だが、これでも俺の一部だ。

『それなら大丈夫だ。お前がちよくちよく思考内に来れば、更に実
力が増した俺がフルボッコにしてやる』

「それ決定事項！？ ……ま、良いけどさ」

何か物語全体通して、戦闘^{いくさ}友達がふえてる気がする。

……殺友^{ころとも}？

普通こついうのって仲間じゃねーのか？ 何だ殺し合い仲間って？

『ところで……』

「ん？」

『また殺し合いをしようか！！ 今度こそ殺してやる！！！！！！』

……

第二十四話 …… 和解？じゃないよな（後書き）

もう何か、アイと『悪魔の王』の関係と同じだと思ってください。

今回の新造語

・殺友
ころとも

お互いが直前まで殺し合いをしていたにも関わらず、なぜかその後仲良くなる関係をさす。

つまりは、お互いを殺したいほど仲が良いってこと。（慣用句？）

第二十五話 アイ弱体化

「こうして殺友がまた一人増えたわけだ。これで合計……三人？」

『ディアボロス悪魔の王』に『怠惰』に『俺』。

うん、凶悪メンバー勢ぞろいで恐ろしい。

「何なんだよ！！ 途中端折り過ぎだろ！！
中略長いんだよアイ兄はいつも！！」

「別に良いだろアリア？ それより、お前魔力増したな……」

「ソレ前の話！？」

「漫才はそれまでにしておけ『ジャンパー跳躍者』、『エンジェル天使の末裔』。
なるほど。『四人』だからこそ、悪魔としての意識を抑えたまま悪魔になったか。

……こんな形で我が課した訓練を達成するとはな！！ 流石我が殺友！！」

それ適用なの！？

と、アリアが驚愕しているが、まあそれより……

「結構時が経っているとはな。

まさかもうそんなに時間は無いなんて」

「大丈夫だろう。安心しろ。後はお前のチェックだけだ。
『エンジェル天使の末裔』は『覚醒』したぞ？」

……マジか。良くやった我が妹アリア。
それより、俺は……

「…………俺は、魔法を使えないんだよな……………」

「えー？ それどういうこと！？」

妹が更に驚き、とまどって俺に問う。

それはそつだろ。いきなり魔法が使えないなんて言ったら、な……。

「聞いた通りだよ。俺自体は、魔力を全部かつさらわれたんだよ。
俺に」

するとその言葉を聞いた瞬間ハツとし、納得した表情をする『ディア悪魔
ボロスの王』。

やはり王。情報なんて腐るほどあるってか。

「…………悪魔変換による…………魔法資質の、紛失か……………」

「何だよそれ！？ ソレで何でアイ兄が魔法使えなくなるんだよ！
？」

「落ち着け『エンジェル天使の末裔』。

……七つの大罪、つまり『跳躍者』についての『傲慢』『怠惰』『
憤怒』。

『天使の末裔』にとつての『色欲』は、魔法を使わなかっただろう
？」

「あ、ああ。それは分かるけど……………」

「魔術、というのは悪魔が使う魔法。これは確かににある。人間が魔術を使うには器が小さいし、なにより悪魔の力を借りることにできない。」

だが、その反対もあるというのだよ。

……つまりは、人間が『魔法』は使えても『魔術』は使えないのと同じように、

また、悪魔も『魔術』は使えても『魔法』が使えないのだよ。勿論王としては別例だが」

まあ確かに俺と最初に戦った時は、魔術使わずに魔法バンバン使ってたしな。

多分、『^{ディアボロス}悪魔の王』に魔術使われたら瞬殺だろうな。

だって魔術なんて、全部の悪魔の力を同時に使えんだろ？ チートだろ。

「それじゃあ悪魔になったアイ兄は……！！」

「もう魔法は使えないってこと。」

……そんなに悲しい顔すんなってアリア。俺はこれで良いと思ってるし、

それに、俺には能力もあるしな！」

世の中ポジティブに考えろよ。

俺自身のキャラが変わってるのはご愛嬌。

「あ、だったら魔術も使えねーや。

いくら悪魔つっても、元……つまり魂は人間のままだし？

人間が魔術使えないってのは、魂の器が足りないからだろ？（簡潔に言えば）」

「……それも一理あるな……ムリに魔術や魔法を使うのは当分禁止。
という事だな『跳躍者』？」

「そ。そういうこと」

「え？ は？ ええええ！？ 何でそんなにあっさりと……！
私の涙の価値は何！？」

以上。実は魔法も魔術も使えなくなった俺の話だった。

『俺なら使えるって言っただろ』

あ、『俺』を忘れてた。（実は話ができたりする）

『忘れんじゃねえ……！！！！』

第二十五話 アイ弱体化（後書き）

少しこじつけっぽいかな？ ……大丈夫なはず。

因みにアリア（妹）の涙は『プライスレス』

第二十六話 『救世主』・襲来

????SIDE

「……………」

スクツと音もなく、何も言わずに立ち上がる。

その男……いや、フードが無いから確定はできないが。

その『人』は、建物の屋上にいた。

「……………時が来た……………!!」

「『悪』を、滅しに行かれるのですか？」

その『人』の後ろに控える、一人の青年。

彼は、まるで王に話しかけるかのように平身低頭で言う。

「今は何も、言わなくても良い。

私一人で、十分だ。……………大規模魔法の準備は？

アレには、心苦しいが全ての民の協力がある」

「すぐにでも発動をできます。媒体は儀式場で」

「分かった」

男は挨拶をし、その場所から離れる。

『人』は一人残り、星空を見上げる。

「……………『意思』よ。運命の赴くままに……………」

『人』はフツと一瞬ため息をつき、その場所から離れ、一般に儀式場と呼ばれるそれに向かう。

「準備は良いな？ 必要以上に魔力をいれるな。私は誰一人として、犠牲を出さずに成功させたい」

一つの大きな部屋。五十メートル×五十メートル程の部屋いっぱい、床に描かれた魔法陣。その周りに集う、数え切れないほどの人。皆ローブに身を包む。一見すれば、神官などであろう。

「は！ 意のままに。……我らに平穏を与えて下さったこと、ありがたく思っております」

「あれが私の運命。………なら、そのままこの、時代を続けるのが皆の運命。

私は何も後悔していない。……では、良い時代を。……送ってくれ」

『は！！』

部屋内の声が一度に重なった。

そして、それぞれから感じられる魔力は集まり、一つの膨大な魔力となり、魔方阵に干渉していく。

次の瞬間、パツと閃光が奔った瞬間、既に『人』の姿は、その部屋から消えていた。

「……………慣れないものだ。別れは」

その『人』は、歩いて…いた。

草原を、ただゆつくりと。だが、世界の一部であって普通では無い場所。

その真ん中で、歩きながら、その『人』は泣いていた。ただ無表情に、涙の目を流して。

「……………彼らの為にも、覚悟しておいてくれ。『三人』」

ただゆつくりと、歩き続ける。

第二十六話 『救世主』・襲来（後書き）

今回は短めでした。

第二十七話 戦前談議 22eyes

今現在の地点、『草原』。

「……………！！ 予想が外れたようだぞ！？ まだ慣れてねえつてのにさあ！

早すぎるだろ『救世主^{メシア}』！！」

「我はもう準備万端だが？ …… 我と同等程度には来れたのだから文句あるまい？

我と同じ力量がもう二人とは、心強いじゃないか」

「……………はあ……………『悪魔の王^{ディアボロス}』。お前そんなこと思わなくせに」

「……………とりあえず、俺様なら大丈夫だろ」

「アロ姉^{ねえ}、そんな珍しく抽象的な……………。これから寝る暇も無いや……………」

「全く、『救世主^{メシア}』如き、我らの力を持つてすれば！！」

「油断は禁物です『悪魔の王^{ディアボロス}』様、ツオルン」

「むぐむぐ……………あ、挨拶？ ちょっと待って、今食い終わるトコ……………」

「『救世主^{メシア}』の魂ってどんなのか？ …… 欲しいね。コレクションに入りたい。
でもそんな暇あるか？ …… 無いな」

「妬^{ねた}ましい……嫉^{ねた}ましい。もっと私に構ってよおおア~~~~イ~~~~
~~~~!!~」

「……なんで最後？ 忘れられてるよね。だってどうせ一番弱いからね。

でもさ、強くなったよ私だって。……アイ、気を抜くな!!」

はい。今のだけで全員分かった人いるかな？

因みに、俺、『<sup>ディアボロス</sup>悪魔の王』、妹、『<sup>アリア</sup>傲慢』、『<sup>ファウルハイト</sup>怠惰』、  
『<sup>ツオルン</sup>憤怒』、『<sup>ベギアデ</sup>色欲』、『<sup>ケフレスカイト</sup>暴食』、『<sup>ハーブギア</sup>強欲』、『<sup>アイファーズフト</sup>嫉妬』だ。

……忘れてた。マスターもいた。

……あと、最後の方俺を呼ぶ声がしたのは気のせいだ。

「ねえねえアイ~~~~」

何か背中に擦り寄ってくるヤツがいるが無視。というかこの非常時に何やってんだ。

『<sup>メシア</sup>救世主』が来たんだぞ!? 俺たち（悪者）を殺しに。  
正義の味方ってのは悪者を倒して一件落着だし。

「『嫉妬』!! アイ兄に近寄るな!」

「……ねたましい~~~~!! 何でアンタはアイにそんなに近寄ってるのよ!!」

「妹だからだ!!」

「何そのパラメータ！ 固有結界？！」

……あの、もう『救世主<sup>メシア</sup>』に侵入されてますよ二人とも。  
それに、どんどん確実に近づいてますよ。

「…………五月蠅い！！」

ごうんッ……！！

と、打てば響く……！なかんじの音を出して倒れ伏す二人。

その後ろには……はい。般若？いや、もっと高位……阿修羅か！

その金髪を振り回しながら、赤い目を更に赤く染まらせる『強欲』。  
その姿は、まさに悪魔と呼ぶにふさわしいだろう……！！」

「…………声に出てるぞ『跳躍者<sup>ジャンパー</sup>』」

……………

「いつから「般若？のトコからだ」…………すみませんでしたあああ！  
！」

「魂とるよ？ コレクションに入れるよ？ 良いのか？」

「すみません。ですからおやめくださいませ」

「はあ…………お前ら、少しは緊張感持て」

『ディアボロス』  
『悪魔の王』はいつにもなく脱帽した感じに言う。

全く何処のどいつだよ。

「もぐもぐもぐもぐ……」

「……………」

「もきゅもきゅもきゅ……」

「……………（怒）」

「うつくんツ！　ぷはああ！！　ふうふう……。  
ん？　何ですか『ディアボロス悪魔の王』様？」

「お前のことだあああああ！！」

王に怒られても、「すみませーん」だけで済ますが、見た目幼女の『暴食』。

これぞ暴食クオリティ。

「アイ兄……私、生き残れる、よね？」

「……当たり前だっつ。生き残れる、じゃねえ。絶対に勝つんだ！　な、皆ー！！」

「……………当たり前だ！（です！）（だよね！）（だろ？）……………」

俺、アリア、マスター、王、そして『七つの大罪』の、総勢11人

の声が重なる。

よし、気分は上々。後は仕上げをご覧じろ！！

もう、既にすぐそこまで迫ってきている『救世主<sup>メシア</sup>』の魔力を感じつつ、

俺たちは、その方向に向かった。



第二十七話 戦前談議 22eyes (後書き)

実は今日、体育祭でした。めっちゃ疲れました。

体育祭の帰り直で打ち上げしましたからね。……勿論男だけです!!

……リア充ではありません。すみません。

……謝罪会見（手遅れだと思う気がする）

はい。

作者のシャーペン芯ケースです。

そういうことです。タイトルどおり。

予想はもう付いてますよね……？

はい。少し急用……いや、休養……じゃなくて。

ちょっとした用事＋スランプで、都合よく休みます。

じゃなくて、本当にこの一週間だけ無理なんです。

生の年生なので。え？ これじゃ最初だけで四通りある？

……それは言わないで……。

それで、どうしても外せない用事ができてしまったので、  
ここしばらくは投稿できそうにもありません。

とか言っておきながら、一応一週間以内には次話投稿します。  
それで、その投稿をしたらまたそこから普通に今まで通り毎日投稿  
を再開します。

こんな良いところ？でこんな知らせをするのは心苦しいですが……  
絶対に面白いモノを書いて見せますのでどうか見続けてくださいお  
願います。

では最後に、

このgdgdな小説、見てくださってありがとうございます。

……まるで終了お知らせでしたね……。

大丈夫です！ 一週間後ぐらいに、またお会いしましょう！！

## 第二十八話 『救世主』の勝利（前書き）

ひさびさの書いたらめっさggggに！

皆さんすみません。自分で読み返しても何が起こってるか意味分かん。

## 第二十八話 『救世主』の勝利

爆音が響く。

目の前に閃光がちらつく。

でも、

「動けない……？」

……もしかしたら、既に俺は、

諦めていたのかもしれない。

この、強大で凶悪な、

『<sup>メシア</sup>救世主』との戦いを。

と、瞬間で、音が止まった。何も聞こえない。……否、まだ聞こえる音もある。

それは、うめき声や呼吸音。そののみ。

『おい俺！ さっさと動け！ それか俺に変われよ！  
早く、早くしねえと死んじまうぞ！！』

思考内。思考内に住む『俺』が叫ぶ声が聞こえるが……

「無駄です。悪魔如き、何匹であろうと同じこと」

女が、いた。

『七つの大罪』と同じくらいの美貌を持つであろうその女は、けれど人間で、

なのに人間には聞こえるはずの無い（普通他人にも聞こえない）はずの、俺と『俺』の会話を聞いていた。

そしてその女は、ため息をつく。

別に飽きるとか、がっかりとかではない。ただ純粹に、リラックスして休んでるだけだ。

「今回の『悪』は、多かったです。……所詮は数のみ。

実力がこれほどとは、『救世主<sup>メシア</sup>』たる私でさえ、失望します。

ああ、何でこんな奴らのために、愛する善なる民を放って置いてしまったのか、と」

女は、自らを『救世主<sup>メシア</sup>』と呼び、俺らを蔑む。

だが、一瞬見せた『民』に対する時のソレは、まさしく聖人のものだったろう。俺にだって、わからない。

「能力発動。対象『救世主<sup>メシア</sup>』」

周囲の空気は俺の前に集まり、そして薄く、薄く引き延ばされその部分から、

段々反対に空気が無くなっていく。

「カマイタチ」

次の瞬間、常人では目視不能のその斬撃の連続攻撃を、不意打ちでその女に放った！！

ヒュウウウウー！！

微かな音を出しながら、『救世主』に殺到するカマイタチの大群。  
しかも前方向だ。  
だが、

「甘い。それに場慣れしてませんね」

気付けば、

女は、俺の真後ろに、いた。

「ツツ!!」

風に乗った蹴りを放ち、瞬時に後ろに跳ぶ。が、

「甘いと言ってあげているというのに」

有無も言わず、弁解も何もなくして、  
その女は光の槍を飛ばした!!

それに合わせて咄嗟に横に                   !?

「ぐツ!?!」

ドゴゴオゴオ!!!!!!

後ろの地面は抉れ、周りに突風が吹きすさぶ。

風での身体強化では足りないようだったな。少し……わき腹が痛む。  
見れば血がダラダラと足を伝って地面にたれていた。

「全く、往生際が悪い。」

……言っているでしょう？ 悪は滅ぶべきもの。

それに、神から受け継いだ私の力、悪程度では破られません」

「神の力？ ……ヘッ！ 不老不死だろうが。」

そんなモノ、神の力じゃないんだよ！！！」

「……なんですって？」

「何度も言わせるな！！ ソレは、神の力じゃない！

悪の力だ！ 化け物の力だ！ ソレは、お前が忌むべき『化け物』の力なん

「黙れええ！！ ああ、神よ、我が罪をお許しになって下さい！！  
この、この悪を滅するのに、どうか私に救いの力を……！！！」

祈る姿勢をとりながらも、殺気だけはビンビンに感じられる。

噂に聞いているよりももういな、『救世主』。

それに、

「神なんて、いない。そんなのいれば、俺が潰してやるよ！！」

瞬間、『<sup>メシア</sup>救世主』が動く直前に、

魔法陣ができた。

ソレは光り、輝き、綺麗で、だがその光は『救世主』を恐怖させた。

それぞれの魔法陣の角には、皆。



「この世の平和のためなら、このようなモノなどっ!!」

「平和か。……そんな大層なモン俺は持たない。

俺の戦う理由は、愛する者達のためだけで十分だ!!!!」

そしてその魔方陣は、俺の叫びに答えるかのように。

輝きを頂点に持っていった。

## 第二十八話 『救世主』の勝利（後書き）

はい。復活アンドめっちゃくっちゃ衰えてた、元から皆無の文才。  
ははは、もうだめです。皆さん、こんな不甲斐ない作者ですみませ  
ん……

## 第二十九話 一時間前（前書き）

小説で禁断っぽい回想シーン。

ま、この小説書き始めの瞬間からソレなんだから自重しないこの私。

## 第二十九話 一時間前

……アイ達と『救世主』。戦闘一時間前。

ザッザッザ……

草原を歩く。草や地面を踏むたびに足音が出ている。  
あちらから見つけられるのももう少しだろうか？

「なあアリア。俺達、勝てるかなあ……??」

「何だよアイ兄。さっきまであんなやる気だったのに、今更弱気発言かよ。」

大丈夫。こっちにはアイ兄と私、それに義父さん。

それと……まあ、悪魔がいるから」

「確かに相手は多分一人。こっちは十一人。  
圧倒的な戦力数差だけど……それが戦力差になるのか、ってな」

「それは安心しろ『跳躍者』。  
それに我らには、秘策がある」

『悪魔の王』の言葉に頷く『七つの大罪』。  
……策？ 聞いてねーよ？

「……聞いてないんだけどさ、話した？」

「まだ話してなかったか。忘れてたな「ちょッ!」」

……内容はこうだ」

その後、簡潔に『悪魔の王』から説明があった。こういうのは自分なのか。

つまり、相手の『救世主』。以前にも言ったが勝ち目が見込めない不死の存在である。

その情報は確実で、そのせいで勝てるものも勝てなかった時さえあるそう。

そんなモノ相手では、いくら『四人』の内三人＋『七つの大罪』＋人間最強がいたとしても、勝てるはずなどないのだ。

力の差は無くとも、命に差はある、ということなのだから。だが、この情報をあらかじめ、何十年も前から持っていた『悪魔の王』は、調べた。

この、『不死』を覆す方法は無いのか、と。  
悪魔総出で探し求めたらしい。いずれ来る戦いに備えて。

人間の住む側の世界の最大の魔法図書館から、本専用の空間。  
そしてこちら側の世界の魔術図書館、魔術所全てを読みきった……！  
それで分かった。

実際、不死などという完璧なモノを崩す魔法・魔術など無かった。  
何者にも崩されぬのだから完璧と言っただから。

……だが、所詮それも、不死になった現時点での『完璧』。  
『救世主』が『三人』と何度も戦っている間にも、時は過ぎた。

次々と生み出され、掻き消えていく魔法と魔術。  
そして、見つけた。

「……………これも魔法・魔術両方に膨大な知識を蓄えている『悪魔の王』だからこそ考えついたもの。  
現存する最高位の対抗用魔術・魔法を、ほとんど組み合わせてつくったモノ。」

それが、唯一の『救世主<sup>メシア</sup>』の不死を打ち消すものであり、それは俺たちに託された唯一の希望だ。

「だがさあ、そんなモンって普通代価？みたいな物が付くんじやないのか？」

いかにも危険そうだし、いくら唯一の希望だからって…………皆が死ぬのは俺だって嫌だ。  
だけど、それを使わないで死ぬのももつと嫌だ」

「…………安心しろ。お前より先にその事を聞いてきた『天使の末裔』にも同じことを返したが、  
絶対にこれを使っても、誰も死なんさ。我が保証しよう」

「…………なら良いけどさ。で、手筈は？」

「まず、私と義父さん、それと『七つの大罪』が先に前衛に出て、囲みたいな役をする。それでやられたフリをしてるうちに、その魔術が使える『七つの大罪』全員が準備するから。」

その瞬間私と義父さんは、『救世主』の隙について拘束。  
それで術式発動　　って感じだけど？」

「俺は？ まさか見てるだけか？」

「アイ兄は、私達全員を見て、何かあったら出れるようにして。『悪魔の王』も、術式構築に時間かかるみたいだし」

アリアが喋り終わると同時に話すマスター。

「アイはまだまだ実践での戦いが私や王と比べて少ない。だが、力はお前が上だ。だからそっちに回したんだ」

「そうだ。貴殿の言うとおりだ。

まあ、我はまだまだ『跳躍者』に負けたつもりなど毛頭な  
ッッ！！！」

瞬間、『悪魔の王』が、その子供の姿で咄嗟に細い腕を、自身の目の前で交差する。

そして、それが防御の姿勢だと理解できたのは、

ビョオオオワアアアア！！！！

「ぐッ！？」

「うわっ！ 何これ！？」

「王！？」

「皆？」

この場所を突風が吹きぬけた時だった。  
それは、どこぞの台風よりも吹き荒れ、そしてすさまじい風圧をか

けてきた。

地面に足を食い込ませる。アリアは腕も地面につく程だ。

だが……

王がその場所には、居なかった。

「っ！？ 『悪魔の王』ディアボロス！！！」

そして刹那の時、

ドガアアアア！！！！

遙か後方      その時の俺にはそう感じられた      で、爆音が響いた。

何かが地面に当たるような音を、そのまま大きくしたような感じだった。

そして後ろを向けば、

直ぐソコに、

『四人』のうち二人。

『王』と『救世主』が、拮抗していた。



第三十話 五分前（前書き）

今回はめっさ短い。

### 第三十話 五分前

「見つけました。悪。この世の為、消えてもらいます」

そう沈黙の中言ったのは、女だった。

美しく、けれども『七つの大罪』よりもなぜか清い。

そう、本能的に分かった。

コイツが、この『女』が、『救世主<sup>メシア</sup>』なんだと。

「王を無視するとは、余裕だな『救世主』ッ!!」

『救世主』の腕から伸びる緑の光を、『悪魔の王』が素手で止めている。

が、段々押されているようだ。

「余裕ではないですよ。今回は結構、数だけは揃えているみたいですし。」

……それに、『跳躍者』と『天使の末裔』まで従わせたんですか？」

「ふッ。『跳躍者』のアレを従わせられる奴がいたら、拝みたいものだ」

「ならば……アレは自分の意思でこの場にいると？」

「その通り」

俺も『悪魔の王』の言葉に頷く。と、女がホッとしたように息を吐く。

「そうですか……安心しました。  
……これで、『跳躍者』と『天使の末裔』にも、手加減をしなくて  
すみそうですね」

その言葉と同じタイミング。  
瞬間で、

「ツツツ                   ！！？ 後ろっ！！？」

地面に手を触れ、岩石を操り、  
そして自分の周りに設       「遅いです」っ！！

「ぐおっ！！？       ガアアアッ！！！」

「アイ兄！？」

気付けば吹っ飛んでいた。そうとしか言い様がない。  
挟れた地面……否、俺が当たり地面が挟れる。

地面の硬い感触が響き、背中からゴリゴリと音が聞こえる。

「う……？」

何だ？   どれくらい経った？

まだ背中を打ち付け、数秒しか経っていないはず。

だが、視界に映る光景は、その予想を狂わせかねないようなモノだ  
った。

目の前に走る閃光。

緑の光の奔流が、誰か見えないが、ソレヲを包み、消し去る。  
吹き飛ばす。投げる。斬る。裂く。叩きつける。

一瞬で消えれば一瞬で遠く離れた敵の元へいき、  
さらに一瞬で叩き伏せる『救世主』。

その力は、圧倒的だった。

既に『悪魔の王』さえも、王の威厳虚しく、地に伏していた。

「ああ……アリア？ マスター？

皆は……どこだ？」

周りは既に草原から戦場へと姿を変え、土のみの瓦礫が積まれ、  
地面は直線的に決れる。

そしてちらほら見える人の、影。

そこで、俺は秘策の事など放って、辺りを見回した。

そこに、いた。

服に埃すら付けていない『救世主』。聖女を。

第三十話 五分前（後書き）

ヤバイ。全くと言っていいほど、前作前々作と比べて読み手が少ない。

ですが、これを読んでくれている人。どうもありがとうございます。

……タイピングマニアってむずいですね。（知ってるかな？ 分からない）

### 第三十一話 倒して、それで、

光が収まる。

そしてその光の発生源の中心に、『救世主』はいた。

腰辺りに手と纏めて光の鎖で巻かれて身動きがとれない状態でいた。

「……なんだ……こんなに簡単に終わる、わけないだろ……??」

「それが終わるのだよ『跳躍者』。」

……七人の犠牲を払ったかいが有ったというものだ」

いつのまにか隣に立つ『悪魔の王』。

……待て。犠牲？ 七人って、まさか！！

「『悪魔の王』！ 悪はそこまでして私を！！」

「当たり前だ。『跳躍者』も何を驚いた顔をしている？

最初から分かっていたことだ。この戦いに犠牲はつき物。

しかも、『救世主』の不死を取り消し、さらにそのまま動きを制限するために、犠牲などいくらあっても足りないだろう。

そこは我がどうにかしたがな」

その七人という言葉。

まさかと思いつつ周り……先ほどまで展開されていた複雑魔方阵の角々を見やる。

「ッッ      ……皆……」

そこには、体の節々から血を垂れ流していたり、既に、その『形』さえも保っていない者さえ居た。

つまり、駒。即ち犠牲。

先ほどまで話していた、敵であり友であつた笑いあつた七人は、今は目を覚まさない。

『救世主』は、いくら敵であろうと、悪魔七人の予期せぬ死に嘆く。そして『悪魔の王』は、それをあざ笑う。

「……あ、アイ兄。早く、駄目。  
……決着、つけなきゃ……！！」

近くの地面に横たわる妹。

「この話は後で聞く！！　今は『救世主』を潰す事が最優先だ！  
やるぞ、王よ！！！」

「言われずとも。『跳躍者』、全力で行け」

「……悲しい。王に駒として使われる悪魔よ。」

そして……自分すらソレに乗っている事に気付かないか、『跳躍者』、『天使の末裔』

『救世主』は動きを封じられたまま、  
力を入れれば壊せるような鎖をそのままにし、こちらを向いてゆっくり話す。

「……『跳躍者』。その、自身の意思で考えなさい。」

貴方は、誰……？？？？」

「ッ！！ 能力発動。対象、空気。  
臨界突破する！ 最大限の重量を、圧縮！！」

能力の限度である質量を操る。

まだ最大限など使ったことは無いかもしれないが……やるしかない！  
今は、相手を倒す事だけ考えろ！

「いくぞオオオ！！！！！！」

「王直々に魔術を使つてやろう。」

……『Diabolos・聖滅戦争』」

俺が超超圧縮の空気の塊を放つ。  
それを『救世主』に高速射出！

そしてそれに合わせて、『悪魔の王』から真つ黒で漆黒で闇の波が  
『救世主』に襲い掛かる。

「……考えなさい。その頭で」

その時、『救世主』のあの女が言った言葉を、思い出した。

次の瞬間、既に草原は消え去り、

勿論それに伴い、『救世主』の姿も消え去っていた。



「……やったのか？　こんなに簡単に？」

『けッ！　結局俺の出番無いじゃんか』

「イタタ……それに私も」

「アイ兄、やったな！！！」

『俺』、マスター。それに妹が祝す。

「おかしい」

『何が？』

「どうしたアイ？」

「アイ兄？」

「……………本当に、コレは、何？」

「何言ってるのアイ兄？　……………本当に、『救世主』倒したんだよ？」

これで帰れるんだよ？　元の生活に戻るんだよ？」

今。

今の言葉！！！！

まさか、な。

「アリア」

「何、アイ兄？」

「……俺は、いつ、この世界で生きてきたと言っただろ？」

### 第三十二話 裏切りは卑怯か

……話した。

こちら側に来る前に、ちゃんと話した。

妹にも、マスターも。

勿論、俺である『俺』だって、言わずとも分かるはず。

なのに。

「え？ どういう意味？ どうしちゃったのアイ兄？」

「何だよアイ。どうかしたのか？」

……どう、した？

これは、違う。

本能がそう警告した。

この二人は、危険だと。

何故いつも一緒にいた二人に対して、こつも危篤感を感じるのか分からないが……

「……俺、聞こえるか？」

『おう。俺だってさっきのアリアの言葉で気付いてるっつの』

『俺』からは何も感じない。

というか俺自身だし当たり前か知らないが、こいつは異変に気付いている。

「……………逃げるぞ『俺』」

おかしい二人に気付かれないように『俺』に話す。  
………待て、二人？

今気付いたが、『悪魔の王』はどこだ？

ヤツは、いつの間にかこの場所から消え去っている。

『良いのか？』

「しょうがないさ。まずは……能力発動!!」

風を巻き上げ、それに乗じて砂埃を舞わせる。  
先ほどまで戦闘を行っていた場所だ。それだけで相手の視界を奪う  
一時的な壁となる。

「逃げるぞ!!」

『ま、待て!!……後ろだッ!!……!!……!!』

「ッッ

」

咄嗟に右手が動く。  
そして……

ガキィッ!!!

機械の神経から、何か当たっている感触がする。

「？ おかしいな。これで貫けるはずでは？」

この声は――！

まさか……

ゆっくりと、後ろ……声の主の顔を確認する。

その姿は、白かった。

とてもとても、白かった。そして同時に邪悪であった。

そう、それは悪魔の権化。いや、王。

そこには、『四人』のうち一人、『悪魔の王』ディアボロスが立っていた。  
その手に一つの真紅の剣を持って。

もし、これで出していた手が生身の左手だったら、俺は貫かれていた。

と思うと身震いしてしまう。

「お前……何をしてる？」

「はて、何をしていると問われれば、

……『跳躍者』。強いて言えば……我が貴様に引導を渡してやろうと、思ったただけだ」

「引導？」

『おいおい。まさかだよ俺』。

……悪い予感が当たっちゃったよ……。周りを見てみる『俺』

周り……

油断しないように、真紅の剣先を機械の出力全開で押さえ込んでい  
る間に、

周りを見渡せば。

「な……嘘、だろ………??」

血溜りに倒れるアリア。

そしてその横にうつぶせで倒れているマスター。

そして、そして巨大な、十字架に磔にされた、

『<sup>メシア</sup>救世主』がいた。

### 第三十三話 別れ話（前書き）

今回、チヨイグロ表現ありますが。

まあ気にしなくても……良いのですか？

だって私が書くと前々雰囲気でませんしね。

### 第三十三話 別れ話

「どうだ？ 良い眺めだろう？ 『跳躍者』よ。

これが、私の芸術。さしずめ、『儚い生命』とでも名付けようか？  
まあ、所詮人の命。

二、三減ったところで世界の意思は気にも止めないだろうがな」

やはりいつも通りに白く白い。

そして周りと比べて一際黒い『悪魔の王』<sup>ディアボロス</sup>は、見た目を  
その子供のまま、口を引き裂くように笑う。

体中から汗がドツと噴出した。

この笑いは、完全に十全に、人殺しの笑いだ。それも至上凶悪な。

この笑い。

まだ超能力を知らなかった時。

そしてこの世界に来る直前に何度か、見た。

この時ばかりは、本능が全力で警告しているように思えた。

コイツは、『化物』なんだと。

「どうした『跳躍者』？

まさか予想だにしなかった訳でもあるまい？

『救世主』<sup>メシア</sup>の不死を解き、倒した。

そして副産物<sup>オマケ</sup>として、『天使の末裔』<sup>エンジェル</sup>とあのクソジジイも地獄に送  
ってやった。

どうだ今の気持ちは？ その心情を言ってみろ」





じゃねえよ!!  
気をつけるよ『俺』!!!!!!」

「分かって アガアアああああ!??」

体を駆け巡る痺れ……いや、眠気、熱、寒気、覚醒、さらには恐怖、慈愛、嫉妬、羨望、性欲。

何から何まで、もう訳が分からなくなってくるぐらい……意識が混乱する。

「ふむ。『跳躍者』の血。美味しく戴いておいた。また頼もつか？」

「……けッ! き、きゅ……………吸血、鬼かってんだ、よ! この悪魔野郎!!!!!!」

「……なるほど。『跳躍者』。お前の心情が分かったよ。  
あくまで全世界の王である我に齒向かうか。仕方ない。……では別れの挨拶だ」

王は血を持った手をダラリと無気力に下げる。  
無防備すぎる構えのはずなのに、意味無く心が恐怖と不安に侵されていくような……。

「『ではまず、別れの話を持ち出そう』」  
ドスッ!!!!

鈍い音を立てて、何かが土むき出しの地面に落ちる音がある。  
そちらに視線を向ける前に。

視界が反転、既に俺は地面に倒れ伏しているようだった。

気付く。足からくる違和感。

そして倒れた視界の先に見える、灰色の布を纏った、足。

それが自分の足だと気付くのに、数秒かった。

「あ、あ、あああああ！！！！！！！！！！」

「『次は、別れ話しに決着を』」

また、音がした。

今度は別に、何が地面に落ちるわけでもない。

だが、分かった。もう一つの足から感じる違和感。

視界を辛うじて下に向ける。

やはり、見なければ良かったかもしれない。

ソレも、足だった。

「うああ、ああああああああああああ！！！！！！！！！！  
??」

「『仕上げは、相手に素敵な言葉を』」

また、まただ。

『悪魔の王』は、あまりにも無表情に、コチラを見据えながら、言葉をつむぐ。

その姿に、俺の精神は恐怖を覚えたらしい。

自分の意思とは関係無しに、両手で王から離れようとする体。ズリズリと引き摺られる感じがしながら、もう諦めていた。

左手が、途切れていた。

ドサツと音がすれば、視界の遥か向こうに、こちらに赤くみずみずしい切り口を見せた、左手があった。

もう、恐怖しか持てなかった。

目の前の、『悪魔の王』という存在に。

### 第三十三話 別れ話（後書き）

あ、今更ですがいつ何話でも良いので、誤字訂正、または意見感想などありましたらどうぞ。

因みに、何か意見がある場合は、何か理由まで書いてくれるとありがたい。

### 第三十四話 救世主解放

「私を開放しなさい『跳躍者』！！！」

「！？『救世主』！」

声が掛かった、と思えば、その声の主は『救世主』だった。顔をあげたら十字架は、すぐ目の前にあった。どうやら這いずっているうちにここに来たようだ。

『おいおい！ そんな事したら、『俺』殺されるぞ！？』

「五月蠅い！ 今はそんなことより、『悪魔の王』を止めるのが先だ！」

……それを優先するためには、まず私を解放しなさい！ 絶対に助ける！！」

多分、不死を失っても未だ、諦めてはいないのだろう目の前の聖女は。

……助けるとは、多分……アリアたちも含めて、だろうな……。

「……邪魔をするな。」

『最後に、その扉を「早くしなさい『跳躍者』！！！！！」

もう、始まった。どういう原理とか、どういう魔術とかはどうでも良い。

ただ、死という結論しか待たないなら、俺は……

「ぐ……よし、機関銃の残弾は、十分。」

これで外したら、死しか無い！ 心して決める御神哀！！」

右手を。いや、既に動かせる四肢など右手しか残っていない。それただ一つを目の前に見える木製の十字架の根元に向ける。

こういう時は思うよ。

こつちの世界は、科学があまり進んで無くて良かったてな！！

「い、くぞ！！」

キュイイイイイイ

カラカラと音が聞こえる。

そして神経のどこかにあるスイッチを探して、押す。

瞬間。

ドガガガガガガガガ！！！！！！

勿論音速に近づく早さで、金属の銃弾は分速何百発という速さで十字架に当たっていく。

そして当然と言うべきか、金属の連続の体当たりにより、その十字架は耐久が持たなかった。

バキバキと音を立てながら崩れる十字架。

「つと。十字架が壊れたからでしょうか、捕縛の効果も薄れたようですね。

……『跳躍者』、惨いですね。貴方は、自分で考えられましたのですか？」

辛うじて顎を地面につけ、斜め上を見ながら『救世主』に返す。

「ヘッ、そんなの決まってる。俺は、皆を守ればそれで、良い！  
！」

「そうですか。……分かりました。  
その大切な者達を守りたい気持ち、私だって十全に持っているつもりです。

良いでしょう。私も助けます。『皆』を！！」

だが、その時『悪魔の王』の声が響く。

「もう遅い。……その扉を閉め、これで別れは、終わり」

ヒュインッ――！

と音がした。と気付いた時は、もう既に、  
視界は血飛沫ちしぶきに染まっていた。

『救世主』の。

「ぐっ……こんな物、私には効きませんよ」

手のひらに少しばかりの切り傷を付けたのみで、  
それ以外は無傷の『救世主』。

「ほう。我としたことが少し油断し過ぎたか。

……良いだろう。我が直々に『救世主』の相手をしてやる――！――！」





### 第三十四話 救世主解放（後書き）

感想、または誤字訂正ありましたら至急、作者までよろしくおねがいします。

また、文の短さは全くの作者100%悪なので。

### 第三十五話 『癒』

「アイ兄!!」

「あ、アリア……？ 何でお前が、ここに？」

俺の前に立ち、『悪魔の王』<sup>ディアボロス</sup>に向かい合う『救世主』<sup>メシア</sup>は、こちらに背を向けたまま話す。

「私の魔法です。分身に『天使の末裔』<sup>エンジェル</sup>とその父を助けるよう指示しました。」

……『跳躍者』同様、その二人にも悪は無いと。私の判断です」

「……そうか。ありがとな」

「いえ。私は「正義として当然の事をしました……」とでも言うか？  
……いえ。」

もうそのような言い草、自分で飽き飽きしました。今だけは、守りたい者の為に、と言っておきましょう!!」

明るくて、それでいて神々しい緑の光は、『救世主』の体を中心に  
どんとどんと、

周りに広がっていく。

それが何なのかとは、今更言わすもがな。

「……行きます！ 守る者達の為に、貴方には消え去ってもらいます！」

光は聖女の右方に集まり、形を成す。

「断罪の翼。……我が罪を許してください」

「はッ！ 翠の片翼！ 面白い！！！！」

『ディアボロス悪魔の王』は、俺から見ても大きすぎる緑の翼を一瞥した後、さらにその笑みを深くし、跳躍する。

「アイ兄。今治療する！！！！」

「治療？ お前、どうやって……」

「大丈夫。絶対に、  
両足も左腕も、直してあげる！！！！」

無駄だ。……これは『悪魔の王』によつてつけられた傷。  
そんなもの、同じ『四人』でも完全に治せるかなど分らない。

「見て、アイ兄。これが私の……『覚醒』のカタチ」

アリアは、俺の切れた右足を持ってきて、元の場所にくつつける。  
そして……その斬り跡が、光に包まれた。  
純粋な白。同時に強く、そして癒される。

『覚醒』。『四人』がなるもう一つのカタチ。

そうか。アリアのカタチは、『癒』か。

アリアが覚醒したのは、聞いていたが。  
だが、それでも知らなかった。聞かされなかった。

「はぁ……こ、れで、一つ。もう、二つ」

「む……無理、するな。アリア」

俺も昔……前の世界の時、自分の右腕を分離させ、  
それをそのまま神経などいじって紫に付けた。……あの後だって、  
能力の酷使で体力を消耗。

医者からもう二度とそんな無茶な真似はするなって言われた。

それで、細胞も途切れ途切れの、いわゆるぶつ切り状態の  
俺の四肢をくつつけているアリア。  
負担の違いは一目瞭然。

「む理じゃないよ。わたし……アイ兄の為なら……」

白い光が無くなる。

そして、戻ってくる感覚。既に両足は、神経・血管共々塞がっていた。  
た。

「……あと、ひ……と……」

フラフラと覚束ない影。

そして

「アリアっ！？ 大丈夫か！？」

アリアは、そのまま目を閉じ気を失った。

……これが『治療』の代償。だが、まだ寝てるだけ。……でも。

「二度とやらせる訳にはいかないよな、兄として」

もしまた今度やってしまったら、どうなるかわからない。

いくら『四人』の内一人がする治療でも、やはりそれは魔法の一種。代償は相当なものだ。

「さ、てと。血が欲しいとこだけだな……行くか」

両足の感覚をもう一度確かめる。

「よし。走れるか。……『救世主』。俺も加勢する」

そのまま、アリアを寝かせ、

俺は緑と黒の光が入り混じる中に向かった。

### 第三十五話 『癒』（後書き）

もう、自覚してますけど私って、  
中二病設定マニア。

……感想、または誤字訂正ありましたら、感想欄にてご報告ください。

### 第三十六話 アイ・半悪魔化

「うおおおあああ!!!」

風に乗ってカマイタチを連射。  
黒い光に飲み込まれていく。

「なるほど。『天使の末裔』に治してもらいましたか。  
ですが、その左手は……??」

「これは後でどうにかする！ 今はアイツを休ませるだけだ」

「後で、か。それは我から逃げ切れると思っただけの言葉か？」

「はっ！ 逃げ切るんじゃないよ！ お前を倒してやるんだよ！」

体の芯が熱くなってくる。両足から漏れる黒いモノ。

液体みたいで何かわからないそれは、ところどころに複雑な紋様を  
描きながら、上にせりあがる。

気分が高揚する。今なら何でもできそうな考えになる。

そしてそのまま、思考内で、先ほど『俺』と話しあった通りにした。

これは、悪魔の『俺』とって代わるわけではない。

だが、人間のままでいるわけでもない。

言うならば、これは半悪魔化。思考内の主を俺としたまま、体を悪  
魔にすり替える。といっても、それも一部だが。

「だけどこれで、お前と決着をつける準備はできた!!!」



両足の一部に黒い線が入り。

そして右手の機械の部分にも多少その『線』が入っている。その線を中心とし、体がどんどん熱くなってくる。

『行くぞ！　しばらくは俺がもたせる！　速攻で決めねえとマズいぞ！！』

分かってるさ。これは体が俺のまま悪魔にするもの。

その実、俺自身の体の負担が半端無い。こんなことを長く続けてたら、体がもたない。

俺は、自分は死んでも良いから、他人を助けるとか、そういうのが嫌だ。

絶対に俺は死にたくないし、他人だって死んで欲しくない。なら、

「どっちも助けて敵を倒してハッピーエンドってなあ！！！」

悪魔の強化された脚力、予想以上だった。

一瞬で『悪魔の王』に詰め寄り、カマイタチを振るう。

風斬り音と共に、少し灰色みを帯びた黒い刃が王に当たる。

「よし、これなら「倒せるとでも思ったか！！」「！！！」

右側から衝撃。

咄嗟に右手でその正体を弾くが、反動で後ろに体が持ってかれる。

「我が一介の半悪魔に殺されるとでも思ったか！」

『悪魔の王』は右手を突き出し、漆黒の奔流を流れ出す。  
それを左に跳躍して避ける。

そして着地と同時に圧縮弾とカマイタチを発する。  
どうやら悪魔の力が付与され、能力で操った風にも魔力があるよう  
で、当たったらそれなりにダメージがあるらしい。  
王は受け止めようとせず、それらを避ける。

「……こんなんじゃ駄目だ。魔術相手に能力は、相性が悪い。  
なあ『俺』。魔術は使えるのか？」

『あ、ああ一応。だけどよ、そしたら『俺』がどうなるか保証でき  
ねえ。

俺は悪魔だし大丈夫だが、お前はまだ人間だ。それでも………良  
いのか？」

「……勿論！！代償無くして大きな力は使えないってことぐらい、  
前から知ってるさ。

でもな、俺は死ぬつもりなんて無いからな。思考を完全にお前に譲  
る！好きにやれ。俺にかまうな！！」

『そうかよ。ま、『俺』がそう言うなら良いけどよ。  
本当に死ぬなよ。まだ『俺』とは戦い足りないんだ」

「分かってるって。思考と体を完全に譲るから、やれ！！」

瞬間、意識が空中を漂うような雰囲気になる。  
周りは暗闇。光は、全くない。ただ、気を集中させれば、『俺』自  
身が見る光景が見れる。

「!?!? 雰囲気が変わった? 『跳躍者』! お前まさか!?!」

その『救世主』の問いに答えた、体のほとんどを黒に侵食されたソレは、アイの声で、姿で、けれど全くアイでは無かった。

「分かってるつつてんだ!! いくぞ『救世主』! お前は悪と共闘するぜ!?!?!」

### 第三十六話 アイ・半悪魔化（後書き）

因みにアイの中の人（オイ）は、『（nice boat）』  
なので。

だから『（禁則事項です）』。

**第三十七話 出来ない影（ふくせい）（前書き）**

アイの出番が無い！！

アイの出番は無いが、主人公の出番はあるというこの矛盾。

### 第三十七話 不出来な影（ふくせい）

「おらあああ！！！」

右の拳に肉が当たる感触がまたして、『悪魔の王』が吹っ飛ぶ。  
ははは！ 爽快だなああ！！

「ハッ！！ まだまだだろ『悪魔の王』ディアボロス！！？」

「当たり前だ。こんな程度でやられてたまるか」

また地面から立ち上がり、服に付いた砂埃をパッパッと払う仕草をする。

効いてないのかコイツ？ いや、まさかな……。

あ？ 何で俺かって？ 俺は『俺』だからな。どうでも良いだろそんな事。

「強がりもそこまでにしとけ！！」

再び強化された跳躍で接近、相手も黒い何かを放つが、その隙間から懷に飛び込み、

「おらあッ！！」

また、灰色の光が纏われながら『悪魔の王』の体にぶち当たる。

『俺』じゃないから能力とか言うのは使えないし、魔術も制限されるなら、俺の武器はこれだ。

「『跳躍者』！ 油断は禁物です。こんな程度でアイツが倒れるはずありません！――！」

まあ、確かに俺もそう思う。

今まで『俺』やその妹、そして横にいる『救世主』までを陥れてきた奴が、  
いくらあの拳だって倒れやしないとは思う。

また、砂煙の中から『悪魔の王』が立ち上がる。

今度は服を払おうともしない。

ただ、ただこちらを見て笑うだけ。

「……準備完了。我としては二人同時に来ないと、逆に何かあるのではないかと不安で不安だったのだが、な。

ソレならば問題無い。もう少し楽しませてくれ、『跳躍者』に『救世主』。

それと………その為に君たち二人には我達と同等の者に相手をしてほしい」

その笑いをニイイと深くする。

そして

「なんだア？」

「アレは、影？」

影？ 『救世主』が言うにはそうなんだろうが。  
それにしても、影に質量なんてあるのか？

今、俺の目の前では、影があつた。

『悪魔の王』の傍で、地面に張り付く影は、いきなりその頭を持ち上げた。

と、瞬間でソレは地面から離れた。勿論、王の影も無い。

その影もどきは、地面から離れてすぐ、カタチを取り始めた。

粘土を固めるがごとく、グニャグニャと変形しながらカタチを整える。

そしてそれは……

「俺か？ 何とも悪趣味な粘土だ」

「自分で言いますか……？」

俺と同じ形をとつた。とは言つても、所詮は影。

俺は『俺』の体に黒い部分がいくつかできただけで、前よりは人に近いと思うが……

目の前のソレはもうただの人形だ。

黒い粘土をこねて作つた俺の偽者。そうとしか思えないほど不出来なものだつた。

「何だこりゃ？ そんな出来損ないを俺と？」

「当たり前だろう？ 先ほども言つたように、我とこの『影』は、君たち二人それぞれ実力が合う者に来て欲しいのだ。分かるか？」

「ヘッ！！ そんなの、俺とお前に決まってるだろうツ！！？」

再び跳躍、『悪魔の王』に向かうが



「なッ？」

弾かれた。

完璧にタイミングを合わされて。いや、最初から同じだったように。

しかも、『悪魔の王』ではない、あの影だ。

アレは一瞬で俺と『悪魔の王』ディアボロスの間に割り込みやがった。

「何だよ、コイツを倒さなきゃメインディッシュ主賓にはありつけないってか？」

「その通り。もっとも、君がたどり着くのは主賓（死）だが」

何だよ、面白いことしてくれるな『悪魔の王』。

そうか、なら。

「コイツからぶっ潰す！！！」

### 第三十八話 魔術＋能力Ⅱ

影が収縮、そして弾ける。

だが、飛んでくるそれらを手で落とす。大体、破裂した程度のスピードで来る欠片など、遅すぎて欠片が出る。しかしそれでも。

相手は強かった            いや、本当に俺に合わせた強さだった。  
俺と同等に調整したがごとく。

「うおおおおー!!!」

ズッ……

と鈍い音と共に、拳は影に当たるが。  
いや、その表現は間違いだろう。現に、拳は効いていない。

また、影はまるでゴム製品のように衝撃の大半を吸収する。  
そしてそれを使ったか分からないが。

バンツッ!!!

と破裂音がして飛んでくる。また黒い欠片。

相手に効きもしない打撃攻撃をするたびに、奴はその場からピクリとも動かずに、

体の一部（実際まちまちだが）を風船のように空気が入ったが如く膨らみ、破裂しては元に戻るといふ、

なんともふざけた無限ループを繰り返していた。

「影の中身はゴムでしたっけかあ？ 何か厄介だな。奴から攻撃の素振は無い。かと言って攻撃しても効かない。……イラつくわ」

『おーい。そのストレス俺にビンビン来るんだけどさ、止めるってそれと、打撃が駄目だったら魔術使え』

「良いのか？ そんな軽く言っても、コレの大元は人間オマエの体だぜ？ 正直言って不安じゃねえの？」

『……俺は、できる選択肢を全て選びたいだけだ。それにその体の主（俺のコトな）が言ってるんだし。いいよ』

思考から語りかける『俺』。……これだけ言つとどっちがどっちか分からん。

それはともかく、『俺』の考えたらしい、ある作戦を聞いていた。

それって『俺』が危険だろ？」

『構わない。それに数秒なら俺だって持ちこたえられる』

「でも、そんな瞬間で入れ替わったりしたら……」

『大丈夫だつて。』

……それより、敵さんが動き始めたぞ。さっさとしろ』

「！？」

見れば、今まで全く動きを見せなかった影は、ノロノロとだが、少しずつ動きはじめていた。

こうして改めて見れば、その不気味さと奇怪さが顕著に表れる。

「……………ちと不安だが、やるしか無いか」

両手に力を込めれば、その周りに灰色の紋様が浮かび、それがゆっくりと動く。

回る。そして光る。

「ベリアル……………掌砲・両極」

目の前、ゆっくりと動く影にかざした両手の掌から、

無音で、灰色の魔砲が出た。

一瞬にして出る高圧力・高密度の魔力の塊。

ソレは砂埃をあげながら、影を飲み込み、それでも勢いを衰えさせないままいつまでも、地平線まで続いていくように見えた。

「……………やりすぎたか？」

だが、やはりそこは究極最高の悪魔、ディアボロス『悪魔の王』の構築したモノらしい。

これくらいでは、死にはしなかった。

少しずつ動く影。

そして次々と

バババババンッ！！！！

周りからする破裂音。

今までに無い速さで飛ぶ黒い欠片。中には塊と呼んでも差し支えないようなものもあったが。

「無駄だ。能力発動。対象、俺の触れる服を除く全物質。効果は、その粒子の一粒まで分解する」

弱い。

影はどんどん迫るが、俺の体に触れた順から粉以下の小さい物質となり、宙に混じって消えていく。

確かに『俺』は能力を使えない。でも魔術を使える。

そして俺は、能力を使えるが、魔術は使えない。

「これが作戦その一。交互に苦手分野を克服しちゃおうぜ大作戦（アイ談。名づけ親は『俺』）」

### 第三十八話 魔術＋能力Ⅱ（後書き）

感想または誤字訂正。またはアドバイスなどありますたら。

### 第三十九話 王の目的

「……無理しやがって」

あ？ 今の俺は俺だ。分かるだろ？

でも『俺』の奴、無理してるな。  
分かるだろ。言っただろ？ この体は、魔術を使うのには脆もろすぎる。

「俺の体じゃねえから痛みなんて無いが……どうみても危ないだろ」  
魔術の為の魔力を両手に溜め、そして人間に無茶な術式を使った反動。

掌・手の甲のところどころが切り傷みたいになって、血が出る。  
俺が無理やり動かす分には問題無いが、肩も外れかかってるっぽいし。

「これでアイツ死んで無かったらキレるわマジで」

そんなコトをつぶやいているうちに、影は。

姿を消していた。

粉々にされ、ほとんどの影がカウンターで飛んできた。  
そしてそれらを全部消滅させたのだから、当たり前と言えそうな  
のだが。

「ま、主賓は『悪魔の王』ディアボロスだし。

こんな弱すぎの噛ませ犬役も、ここで終わりだろ」

と、

「……解けちまったか」

左手は段々と形を崩して行き、そして黒い紋様が晴れた場所には、何も無かった。

「元々肉が無い場所に腕を作るのが難しいってのになあ」

これのだが、『俺』の体には負担がかかる。

しかしこれも一応は、『俺』の提案した作戦の内。火力を増やすだけに、負担も増えるんだがな。

『だから、負担なんか考えなくて良いよ。俺が望んだことだ』

「そうは言ってもなあ。……『救世主<sup>メシア</sup>』はどうなった？」

再び、改めて回りを見渡すが……いた。

未だに戦況はどちらにも傾いていないように見えた。

多分、同等の能力というのはそのままの意味らしかった。どちらも攻撃は拮抗するのだ。

「加勢してやるよ『救世主<sup>メシア</sup>』……!!!」



「！ 無事でしたか！」

「なるほど。我が思うより『跳躍者』は犠牲知らずだったらしい。影を倒してよくここまでたどり着いた、と賛辞を送らせてもらう！」

『救世主』。貴様は、知っているだろう？ 『四人』の結末を」

いきなり、まるで童話を読む子供のようになる『悪魔の王』。  
何だ？ 挑発させるための罠？ それとも気を逸らせるため？

『救世主<sup>メシア</sup>』は、ゆっくりと口を開く。

「……『四人』は呪われた者達です。結局は殺し合いとなる運命。だが、その最後に残った時、……………まさかッ！！??」

その救世主の言葉を聞いた瞬間、またしても再び笑う『悪魔の王』。  
どういうことだ？

「その通り。察しが良いな『救世主』。  
そうだよ。我の目的でも教えようか『跳躍者』？」

「目的…………??」

「そうだ！ 王である我の、崇高なる目的。それは、

『意思』となるコトだ」

## 外伝 童話 1

むかしむかし、あるところに一人の女の子がいました。

名を                    と言いました。

その女の子は、ある日思ったのです。

「なんで悪い人がいるのだろう？」

子供ながらの、純粹な疑問でした。

しかし、その純粹すぎて、そして何よりも本気なその思いは、

世界に決断させるには、十分でした。

女の子は、大きくなり、既に少女となって、  
むかしの疑問を、探していました。

そして、その旅の途中途中で、困っている人々を救い、  
まるでおとぎ話にでてくる人のように、していました。

でも、思いました。

「それでも、悪はいなくならない」

そして旅を続け、

しばらく時間が経ったとき、出会いがありました。

ある少年との出会いです。

彼は、少女と出会い、そして一緒に旅をすることになりました。

ですが、少女は戸惑いました。

なぜなら、その少年は、少女が嫌いな悪の大元である、悪魔だったからです。

でも、少年は、そのことを知っても、少女と共にいました。

少年は、悪いことを何もしませんでした。

だから、少女も一緒にいられたのです。

そしてそのまま、少女と少年は悪を倒し、人々を救いました。

二人は大人となり、そして結ばれました。

旅をしているうちに、二人は恋におちていたのです。

さらに、また時間が過ぎ、ついに二人は、別れることになりました。

少女は、人間。

少年は、悪魔。

その命の長さの違いは、ありすぎたのです。

少年は、その若すぎる姿のまま、

会った時と違う、老いた少女の隣にいました。

すでに命をまっとうし終えたその女性は、少年に笑いました。

「最後に、あなたという善が見れて、良かった」と。

そのまま、悪を憎んできた少女は、老いてその命を、散らせました。

少年は嘆きました。

「ここに救いは無いのか」と。

しかし、少年は決心しました。

以来、少年は再び世界を回り、様々なまほうを勉強し続けました。

ですが、その変わらない姿は、人々に、逆に、疑われました。

少年は、追われました。

自分達が助けていた人々から、何百年もかけて、逃げなければいけませんでした。

そしてある日、見つけたのです。

使ってはいけないまほう。

少女を、少女にして生き返らせるまほうでした。

少年は、その傷ついた体で、そのまほうを使いました。

そして、世界は光に包まれ、それが戻ったとき、

少女は、その幼い体のまま、目を覚ましました。

## 外伝 童話2

少女は、最初驚きました。

なぜなら、自分は死んだはずで、しかも老婆だったはずだからです。

しばらく考え、そして気付きました。

「  
！！！」

少女自身の隣には、寄り添うように、  
別れた時と同じ姿の

悪魔の少年が、冷たくなっていました。

少年は、その僅かな残りを振り絞り、少女に告げました。  
いくら悪魔といえども、人一人をよみがえらせる魔法など、使つて  
はいけないものでした。

「君の目に、今でも僕は、善として映ってくれているだろうか？」

と、少年は、掠れた声で、言いました。

少女は言いました。

どうしてこんなコトをしたのか、と。

なんで一人で生きてくれなかったのか、と。

ですが、少年は心から嬉しそうに、言いました。

「もう一度だけ、会いたかった」

ただそれだけ。

それだけの理由で、悪魔の永い命を終わらせたのです。

少年は、そのまま光を消えさせました。

少女は、思いました。

「善って、なんだろう？」と。

自分が救ってきたのは、善。

でも、少年を追い詰めたのも、その人々。

倒してきたのは、悪。

けれど、自分にとっては、

自分に感謝してくれた人々さえも、悪に見えた。

少女は、嘆きました。

「なんで、なんで善は、悪になるのだろう。  
なんで、世界は悪を尊ぶのだろう？」

少女は、決意しました。

絶対に、悪をなくしてみせる。

少年が世界に殺されても、それでも少女は、世界に善があると思いました。

そしてまた、旅に出たのです。

少年を、世界のどこにも知れぬ地に埋めて。

やがて、時がまた、さらに経ちました。

少女は、綺麗な女性となりました。

人々は、その姿を見て、またしても、聖女の生まれ変わり。と、言っていました。

ですが、少女はまた、あせっていました。

自分が死ねば、また世界は悪でいっぱいになる。ならどうするべきか？

答えは、少年がおしえてくれました。

命を、永らえさせれば良いのです。

永遠の命をもって、世界から悪をなくせばいいのです。



少女は、自分の二度目の生まれた地を訪れ、  
そして魔法をみつめました。

それは、少年が使っていた魔法でした。

少女はそれを使いました。

気付けば少女は、その綺麗な女性の姿のまま、老いることはありませんでした。

ですが、人々も、それを見ても、  
聖女とあがめるだけでした。

やがて少女とともにいた少年は、世界から忘れ去られ、  
そして少女は、悪をなくしていきます。

少年の死は、どこまでも少女の心におかれ。  
そして少女も、少年のことを忘れませんでした。

そして、すでにたおすべき相手がいなくなってから、数年。

突然、少女は招待されたのです。

世界の意思は、言いました。

『悪を、倒してくれないか？』

## 第四十話 鮮血の……

『四人』は、いずれ違<sup>たが</sup>う運命。

だが、その死闘の中で、真実を知るものも現れる。  
生き残り、最後の一人。

世界の意思と会う権利を持つ。

『救世主<sup>メシア</sup>』も、人間でありながら不老不死の加護を得、  
そしてその悪の憎みようで、意思に見定められた。

「我は強い相手を殺すことしか楽しめないからな。  
だから、世界の意思に会うのだよ」

「それでどうするつもりだ!!」

「……愚問だな。別にどうもしないさ。

我は、自らの願いを言い遂げるのみ。それには、貴様らを殺す!!」

いつになく興奮した様子で、

そして、人間である俺達から見れば、狂っているともとれる恍惚と  
した表情をする。

もう、手遅れなのだ。

既に『悪魔の王<sup>ディアボロス</sup>』を説得するには時間なんて無いし、  
それに相手だってそんなつもりなんて欠片もない。

なら、せめて、意思に会える権利を持つ『救世主<sup>メシア</sup>』、  
『跳躍者<sup>ジャンパー</sup>』で

引導を渡してやるしかない。

いや、そんな小難しいこと考えなくても良いか。

ああ、これで良いんだ。これが俺だし俺で良いのだ。

俺は俺だし、俺は俺のままでもいい。

「俺は俺のために、王を止めるぞ!!」

「好きにしろ!!」

さきほど奴が持っていた剣……『血』と言っていたか？  
それを弾く。

風剣が王を切り裂こうと迫るが、相手は跳び、空中に投げ出された  
『血』を拾いながら着地する。

「おおおおおッ!!!!」

風と『血』がぶつかる。

そしてそのたびに、新たな剣圧ができ、吹き飛ばされそうだ。

「はアッ!!!!」

「つつぐッ!!」

ザシュッ

王の肩から血が少しだけ噴出す。  
それを確認した途端、俺との打ち合いを中断、下がる。

王が居た場所を見れば、そのすぐ後ろには勿論『救世主』。

「いくら相手が『ディアボロス悪魔の王』だとしても、

『四人』のうち二人が相手では勝ち目が無いんじゃないですか？」

「我を舐めるなああああ!!!!」

その途端、再び斬撃の嵐。

さらには魔術も降ってくる。

それをよけつつ、足を踏み込

「ガアアアアアア!!!!?!?!?!?」

ぶしゅッ

腿<sup>もも</sup>には、バツサリと切れている傷口。  
そしてとめどなく溢れる血液。

「ん、だよ。またこんな展開ですかよ……」

「ははははははははははッ!! とうやら人間程度の身で  
悪魔の真似事をしたのが間違いだっただようだなああ!!」

『悪魔の王』の刃が迫ってくるが……

「させません!!!!」

ガキンッ

火花が散り、光の短剣によって防がれる。

「貴方は下がっていなさい！ 後は私が！！」

んだよ。こんな大切な時に、よ。

動けつつってんだよ！！

「ぐ……………」

後ろから引つ張られる感触がする。

つい、その感触に振り向いて……

「アリア！？ おま、お前！ もう大丈夫なのか！？」

「何言つてんだよ！！ 私よりどー見てもアイ兄の方が重症だろ！？  
ったくよ、治療してやるからさっさとアイツを倒してよ……………ね？」

「……………要らん」

「は？」

「要らない。こんななお前の治療なんて、いらない」

「強がるなよ！ 私はしたいから治すんだ！ 良いだろ！？」

だが……

それでもコイツに負担をかけるわけにはいかない。

「俺は、兄としてお前に頼るわけに「もう良い!!」「うわッ!!?」  
抱きつく妹。

そしてその周りに光が灯り……!? まさか、治療してるのか?!

「やめろ! 離せっ」「いやだ」……………「アリア」

「もう、兄としてとか、やめてくれよ。」

私は、私は、アイ兄……いや、アイ。アイ・M・ウィルドレースが、  
好きなんだ。

誰よりも、誰よりも。そして、ずっと……。  
だから、役に立たせて……」

「ツツツツ                      ……!!?」

あああもう! チクショウ!

こんな真剣場面壊しやがって!    なんて反応したら良いんだよ!

「あ、アリア、俺は……」

答えをこまねいている、その瞬間。

俺は馬鹿だった。

いくら、何があろうとも気を抜くんじゃなかった。

今は、『<sup>ディアボロス</sup>悪魔の王』との決着の真っ最中。

奴はいつも狡猾で、いつでもこちらを探ってきた。

前だって、俺達が騙されて、幻を見せられてきたばかりなのに……。

「しまった?! 『跳躍者』! 気をつけるオオオ!……!」

『救世主』は叫ぶが、それはもう俺にとっては微かな声だった。

目の前には、鮮血。

俺の胸に突き立てられている、真紅の剣。

だが、その剣も半分程度しか刺さっていない。

なら、もう半分はどこにいったのだろう。と問われれば、すぐには答えられなかったかもしれない。

俺に抱きつき、自らの体力と魔力を消耗させながらも、弱っている俺を治していたアリアの、その弱弱しい心臓には、丁度、

『血』が刺さっていて、その真紅の刀身にはまた、紅の血を滴らせていた。

「あ、ア、アリアアアアアア!……!……!……!」



#### 第四十話 鮮血の………（後書き）

はい。

しばらく自分の小説を読んでなかった作者は、  
どうやら久しぶりに読んだようです。そして思ったこと。それは。

「短すぎ！ だから逆に読みにくい！」

です。

なので、今回から頑張って少しは長くしてみたいとおもいました。  
……今更ですね。

もしかしたら、今までのを手直しして、二話を一話に纏め上げる、  
言うなれば大掃除をするやも……神のみぞ知る。

## 第四十一話 コロシテヤル（前書き）

超能力者の魔法世界譚も、そろそろ終焉に向かいますかもしれませ  
ん。

## 第四十一話 コロシテヤル

「ッ……そんな、『天使の末裔』ごと!？」

「いや、我にとっては天敵を二人同時に減らせるチャンスだと思っ  
たが……別に問題無かろう?」

飄々と、けれど闇を宿した表情で淡々と語る『悪魔の王』。

「貴様はッ!！」

『救世主』の怒声が聞こえる。勿論標的は『悪魔の王』。  
だけど、それより……

「あ、アリア……おい。アリアあ……………」

剣が抜ける。

俺の胸から熱が抜けていくが、気にせずアリアを見る。

表情は、どこか諦めたかんじ。

左胸からは、とめどなく溢れる赤い血。

そして、そこから微かに見える、向こう側。

「あ……イ……………大丈夫、夫? 血が、出てる……………」

まだ生きてる!!

それを実感して、思った。

まだ、諦めない! 絶対に、前の世界の二の舞にはしない!

絶対に、救ってみせる！

「アリア！ 人の心配する前に自分の心配しろッ！  
良いか、絶対に喋るな。今すぐ、今すぐ俺が助けてやる！！」

「あ、ああ……………大丈夫だよ……………それより、アイを、なおさなき  
や……………」

アリアの目は既に焦点を失い、見えるのかどうかも、分からない。  
そして、震える手を、まるで声のするほうにむける。

「治療、しなく……………ちゃ」

「え……………」

瞬間、あふれ出る光。

綺麗な光は、アリアの手から出て、俺の胸に収まる。  
それと同時に引いていく痛みと、戻ってくる熱。

「お前っ！ 心臓に穴開いてんだぞ！？ 無茶するな！ じっとし  
てろ！！」

咄嗟に、治療を止めさせるため。

そして、安心させるために、アリアの手を握った。

その時、アリアは微笑んだ

「温かい……………」。





でも、でも、それでも、そうだとにしても、

「うああううああああああああああ！！！！！！！！！！」

泣いた、と思う。

こんな状況で、と頭は単純に考えるが、そんなの知らない。

瞳から、涙が無限にこぼれるとも言えるほど、泣いた。と思う。

「何だ？　血も繋がらない身近の一人の死に、ああも単純に泣けるとはな」

ディアボロス

「『悪魔の王』。貴方は何も分かっていない。」

泣く、というのは、単純では無いのですよ。……貴方には一生分らないでしょうけど」

再び、爆風が身を掠める。だけど、そんなの気にしてなかった。

「……殺す」

もう、何も聞こえない。「俺」の声も、今や微かにも聞こえない。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す  
殺す殺す殺す

殺す殺す殺す  
殺す殺す殺す





絶対殺してやる。

死んでも息を止めても刻んで潰して弾けさせて燃やしてチリにシテ  
ヤル

## 第四十二話 陽炎

「ハア、ハア、ハア……」

自身の荒い呼吸音のみが辺りに響く。

風は常に吹き荒れ、土ぼこりも舞っている。

空には、陽炎のような、光が屈折しているようにも見えるモノがいくつか。

いや、実際に光が屈折しているからこそ、そう見えるのだが。それらは、全て剣のカタチを持っていた。

きつと形など、操者にはどうでもいい事なのだろうが。

その陽炎の下で、むき出しになった地盤の上で、右手はあらぬ方向へ折れて、左手は手首から先がなくなっている。両足も、骨すら塵としても残っていない。そのような白髪の少年の姿が見える。

だがまだ、その少年に見える何かは、笑い続けていた。

「くくくはハハ！！　これだ！　我と戦える相手を、待ち望んでいた！！」

嬉しい、嬉しいぞ『跳躍者』！！　何も小細工をろうさなくとも、できたのだ！！　意思に会わずとも、できたのだ！！

たった一人を殺せば、このような死合いができたもののに！

ハハハは！！！！ 簡単じゃないか！ 『天使のまゝ』 黙れええええ  
エエエエエ！！！！ 『ゴブツガウツツ！！！！』

アイの手が、『悪魔の王』の胸に突き刺さり、地面にヒビを割らせる。

「お前が、オマエがその名を口にスルナ！！」

陽炎が、揺らめく。  
次の瞬間、

「ゴッ！？」 がっあああ！！？ う、うえッ、おおおお！！？」

陽炎のように揺らめく、実体の無い剣は、目視すら不可能であろう速さで、

『悪魔の王』の喉に突き刺さり、もう一本は、心臓を何回も貫通し、更に一本、内臓が密集しているであろう腹の真ん中に、  
まるで『悪魔の王』を三点で地面に磔にするかのように、刺さった。

だがそれでも、白髪の少年『悪魔の王』は、  
時折口から笑い声を出しながら、喋り続ける。

そしてそれを見る影がもう一つ。

『救世主』は、突然の出来事に混乱していた。

（何故彼はここまで？  
怒りの気持ちは理解できますが、コレは完全に人の身を超えていま  
す！！）

と、そこで彼女は気付いた。

『跳躍者』の体の節々には、黒い筋。  
先ほどまで見えていなかった、どす黒い模様。

ソレは、奇しくも『跳躍者』が、  
自分自身の悪魔の力を行使しているときと、同じだった。

（だが、それではない。

今の彼は、完全に我を忘れている。自分自身すら見失っている筈……。

まさか！？）

「いけません！ 『跳躍者』！！

人間のまま、悪魔の同意を得もせず、その力を奮うなど！！」

ならば考えられる答えは、一つしかなかった。

（彼は、気付かぬうちに、自分自身の悪魔を押さえつけて、  
完全な純粹の人間のまま、悪魔の力を奮っている      ！！）

「ウルサイ。お前にはソンなの関係ないだロウ！！

邪魔をするならお前から

殺スぞ？」

「ツツ　　！！　　ですが、私は、もう誰も死なせたくないのです！  
その為ならば、自身の犠牲など厭いません！！」

「ハハはあハハ！！！！　面白ぞ！！  
さあ、我をもう一度殺してみろ！！

我があの女の心臓を刺した時のようになあ！！！！　ハハアハハハ！  
！！！！！！」

その『悪魔の王』の笑いに、再び顔を歪める『跳躍者』。  
陽炎がまた、動き始める。

「いい加減、頭を冷やしなさい！！」

緑の閃光が、『跳躍者』の右頬を掠り、  
そしてその余波のみでその場から吹き飛ぶ。

「復讐からは何も生まれません。生まれるとすれば、ソレはただの  
『虚』。

意味が無いし、別に意味を見出す必要ありません！

『天使の末裔<sup>アリア</sup>』が居なくなったのは、貴方のせいではありません！！  
だからといって、無闇に自身の体を傷つけるのは止めなさい！！」

「ツ！！」

……それでも、それでも俺は、どんな手を使っても、コイツを殺





## 第四十二話 陽炎（後書き）

何か『悪魔の王』がどんどんM発言まがいをしてくるようになってきてしまった。



## 第四十三話 『意思』

……笑顔がよみがえる。

最初に会った時。そういえばアイツ、盗賊まがいの事してたんだよな。

それで何も持っていないこと気付いて笑っちゃったっけ……。

それで、何だかんだ言いながら、あつさりと、でも深い絆を作った。兄と妹。俺も結局、近くにいる人が居ないと駄目なのかな……。

遺跡に入って、魔物に追いかけられながらも、それだって良い思い出だ。

それで、アイツと戦って、アリアを守って。

あ、ヤバ。

何かまた涙でできそう……。

「何だよな、アイ兄。何ていうか、女々しいよ？」

「アリア……」

「私はさ、元気なアイ兄が好きなんだよ。だから、だから絶対に生きてくれよな！」

幻。

今のは、夢かもしれない。

一瞬だけ見えた、アリアの姿と言葉。

夢が現か幻か。

それともただの妄想？ 亡き女を想うとは良く言ったものだよな。

「ああ、絶対に、これからも生きなくちゃ、な」

「『跳躍者』……??」

「『救世主』。もう、大丈夫だ。

コイツへの、この憎しみは消えないけど……それでも、俺は生きてくよ。

もう、自分のために無茶なんてしないさ」

アリアの残したほんの一欠けらの魔力。

……もう、迷わない。

「『悪魔の王』。お前は殺す。だけど、俺は死なない」

「……………く、は！ ははは……！！ 面白い……！！」

これだから『跳躍者』は面白い。たった一つの魔力残滓でそこまで変わるか……！！

はははははは実に面白い……！！

……………おっと、そろそろ時間だ。

一言言わせてもらう。

……敵は、いるものではなく、自分自身で作るものと知れ」

「あー？ 何だ？ どういう意味だよ！！」

傍から聞いても意味深な雰囲気にする言葉を残し、目を閉じる『悪魔の王』。

……作られるもの？  
訳が分からない。

「言っただろう？ もう時が来た。……お前のことだから、どうせ不殺でも貫くかもしれんが。忠告しておく。」

『意思』は、すぐそこに、居る」

そして、『悪魔の王』が体の抵抗を抜くようにした瞬間

ドウッ！！！！

と、鈍い着弾音と共に鮮血が舞い、俺が抑えていた『悪魔の王』の体は、既に心臓の穴を中心として、灰と化していた。

「ッ  
！！！！？ 『救世主』！？」

「私ではありません！　それどころか、コレは、この光の色は……！！」

『救世主』が焦っている。知っている敵か？

だとしたら、アイツが焦るほど厄介な存在だということだ。

「黒い、光？」

その時、視界に入った光。見覚えがありすぎる、光。そう。魔力が視覚に見えているアレだ。

だが、黒は少なくとも近くの知り合いには居なかった。ということとは、こちら側に介入できるほどの魔法使い？

「……誰か、知ってるのか？」

問いただすと、『救世主』は顔を曇らす。

待て、『悪魔の王』が言っていた言葉。最後に言っていた……。

『『意思』は、すぐそこにいる』

ツツ……！　まさか……！　『意思』って……！！

声が、聞こえた。聞き覚えのある声。

いつの間にか、黒い光は目の前まで迫っていた。

「……残念だ。折角新しい玩具おもちゃを選んだのだが、簡単に二つも壊れてしまった。……だけど最後の二個は、頑丈そうだ……」

黒い光の中には、あの人が立っていた。

違うところといえば、俺が知っている姿は中年のおじさんのようなものだったのが、

今は若返ったかのように、青年の姿をしているところだ。

「……やあ、久しぶり、『救世主』。  
そして始めまして。私は、『インテンション意思』と言っよ」

その顔は、面影を残しているし、何より、感じた。

「……マスター」

言い訳（もう飽き飽きだ（読者の声）） + 答えが返ってくる気がしないアンケート

タイトル通りです、よろしく。

言い訳（もう飽き飽きだ（読者の声）） + 答えが返ってくる気がしないアンケート

え〜。

はい。

またまた死んでしまった登場キャラ達。

…… あっさり過ぎとか、そういうのはホンとすみません。

それはともかく。

実は明日からテスト勉強をしなきゃ大変なことになりそうなので、だから明日から、投稿時間がまちまちになりそうです。（いつもそうだろうww）

270

こんな素人の勢い小説を読んでいる皆さんに、いくつか意見を求めたいのです。（自分の考えを他人に補ってもらうという。何と言う他力本願ww）

……裏顔がなんか行ってますが、本当に真剣にマジでガチですみません。マジガチです。（意味分からんww）

これからするいくつかのアンケートに、答えてくれたならありがたい。

？ はい。ぶっちゃけ色々と案を出してほしいです。  
超能力のほうは良いのですが、魔術が無くなりかけです。何か応用  
が利くような魔術案を提案していただければ幸いです。

？ …… 誰か、アイの超能力の応用性を思いつきませんか？  
空気操作ばかりがでてマンネリ化です。

…… なんか、折角読んでくれているのに、申し訳ありません。

『小説は歌のようにやさしくは無い!!』 某クローン

『それでも！ 守りたい世界（観）があるんだああ！』 某スーパー  
コーデ



#### 第四十四話 審判（前書き）

話数が前二作を越したのかな？ 今更だけど。

## 第四十四話 審判

「……………」

「どうしたのさ？ 何？ 一元の世界（お家）に帰してゝとか言わないの？」

微笑しながら、簡単に人の思考を呼んでくるマスター、いや、『意思』。

コイツのせいで、俺はここに飛ばされ、それで、……アリアも……。

「『意思』よ。久しぶり……と言いたいです。それが、それよりも、話を聞かせてもらいたい」

「ん。どうぞ。何でも良いから言ってみな」

「………… 『ディアボロス 悪魔の王』 は、『意思』が？」

傍から聞けば、何とも理解しがたい質問だ。だが、今までの非・現実的な経験をしたからには、察さざるをえない。

「そうだよ。と、言いたいトコ何だが、ね。

……今回、いつも組んでた『三人』のうち、一人が裏切ったのは別に私のせいでは無いよ。

私はただ、頑丈で長持ちする遊び相手が欲しかったただけだしね……。

……神の末端から墜とされて早。っと、生き物には聞き取れないか。

まあ良いか。

とにかく、私は別に何もしてない」

「……………アリアは」

「？」

「お前、世界の意味なんだろう！？ それなら、アリアだって生き、それ以上言っな。死ぬよ？」

「！」

『意思』の手は、首元。俺の、だ。  
今にも力が込められそうに震えていて、もしそうになったら簡単に首の骨など。

「生き物。命つてのは一つに一つ。よく神さまが不老不死を謳歌してるって言うけど、神様だって寿命はあるし。  
それなら、底辺にいる人間はどうなんだろう？  
……………分かるだろ？ それ以上踏み込むな。それに、私だって知らない」

俺の頭、胸をトンと指で軽く突きながら話す。

そしてすぐまた離れていく『意思』。

「個人の意思は尊重しよう。って言うけど、そんなの間違いなんだよ。」

人　　生き物。命あるものつてのは、生きているかぎり、

お互いに干渉し続けてくんだ。  
それなのに、個人も何も無いだろう？ まったく、汎神論とはよく  
言ったものだ」

軽く笑いながら、跳躍。そして宙に舞っている状態のまま、動かない『意志』。

「さて 歓迎しよう。今回の生き残り。『跳躍者』君、『救世主』ちゃん。  
此处が、我が城。『世界』だ」

移り変わる、景色。

世界が黒く塗りつぶされる。……いや、上書きされる。  
まるで絵画の上に、黒い絵の具をぶちまけたように。

一瞬で景色全ては黒くなるのに、お互いの姿だけは見える。

「……さてと。『跳躍者』は初めてだな。『救世主』は何回か来た  
ことあるな？」

「……………審判の間」

『救世主』は、顔を俯かせて唸るような低い声で言う。

「審判の間？」

繰り返す俺の言葉に、嬉しそうに、そしてどこか寂しそうに頷く『意思』。

「そ。そろそろこの遊戯も終わりって事だ。

……では、始めて」

。いつの間にか、黒い空間の中に椅子を出してゆっくりと座る『意思』。

何だ？ 始めろって事は……何を？

終わりに近づいてる？ 勿論ソレはこのフザケタ戦いの終わり。

ってことは……！！

「チツ……！！」

体側面全てに、風が薄く収束。狭い中に暴風が吹き荒れているので、少しばかり陽炎のように揺らぐ向こう側。

そして、その向こうに見えるのは……！！

「『救世主』……！！……！！……！！」

「ふっ……！！

とうとうこの時が来たようですよ『跳躍者』。

この、審判の時。私は、コレに勝って、また命を永らえさせなければならぬ……！！」



## 第四十五話 真実の最後の決戦・序

「右腕を掴んで、それからどうしたと思う？」

「……………？？」

「力を、使ったんだ。それも、とびつきり凶悪なのを。  
世界の意味も、『救世主』。お前も知ってる通り、俺には、他の『  
三人』のは無い、ある力を持つてるんだ」

世界の意味は意味深な笑みを浮かべ、『救世主』は更に疑問の声を上げた。

「それは、風が操れるだけでは無いのですか？  
現に、決戦では……………」

『救世主』は右腕を抑える。

そこからは、血がとめどなく流れていた。能力によって、触れた瞬間に細胞同士の結合を弱めたのだ。

触れたとき。その刹那ではソレが限界だが　それでも十分だ。

「『救世主』。はつきり言って、俺はお前と戦いたくない。  
だけど、ここで死ぬ訳にもいかない。……………それに、

アイツ等が待ってるから

頭に思い浮かべるは、自身の愛する者の姿。  
そしてその周りにいる、日常。

コチラ側の世界で、アリアと出会ったその間もまた、日常だった。  
だがそれも、失ってしまった。

服のポケットには、アリアの魔力残滓を入れた小瓶がある。  
……前にアリアに教えてもらったのだ。

『魔力は、別の魔力を溜めた中に入れておくと、保存できる』って。  
たく。そんな知識がまさか、こんなので役立つとはな。

だが今は、集中しろ。

その『日常』に帰るためにも、目の前にいる女性。即ち、『救世主』。

この難敵を倒さなければ、勝ち目は無い。

前に全力で走る。  
風が頬を撫でる。

瞬間、来る緑の光の筋を、右斜め前にステップを踏んで、かわす。

そしてそのまままた近づくために走る。

風の翼を纏い、ほぼ地面に足がつかない状態で走る。



もう一回触れれば、勝てる！！

そう。俺の能力はそういうものだ。  
短い時間ならまだしも、相手にダメージを負わせるのと同時にやれば、問題ない。

「変わるぞ！！」

『分かってるつつの！』

久々の登場。

先ほどまで、俺が無理矢理押さえつけていた反動で意識が混乱していたらしい。

「行くぜええ！！！！」

一瞬で、外見がより凶悪な、まさしく悪魔の雰囲気纏う。  
左腕は黒い何かがかたちを作る。

両手の掌を広げ、そしてその中心から出る黒い短剣。  
その数、両手にそれぞれ一本ずつ。

「おらア！！」

右手の短剣を振り下ろす。

それは『救世主』が持っている緑の剣によって弾かれる。  
が、それと同時に左手を突き出す。

しかしそれも空を切る。『救世主』は後ろに跳躍しながら、今度は槍を持つ。

「はアッ！！」

『救世主』の掛け声と共に、その槍が上から下へ。

振り下ろされる。

それを咄嗟に両手の双剣を十字に交差。受け止める。

そして拮抗状態。

徐々にコチラが押し返されるような錯覚に陥る。

「そんな何度も近づけさせるとでも？」

「ヘッ！ そうだよなあ！！ だけど、俺は面白いぜ？」

ガキンッ！！！！

金属音が鳴り響き、槍は『救世主』の手から離れる。

同時跳躍。

仰け反っている『救世主』の後ろに高速移動。

そして右手に持っている短剣をその首に

血が辺りに飛び散った。

## 第四十六話 知るかそんなの（前書き）

はいはい！！

投稿遅れました！！      つか自分でも遅れすぎだと思ってるのでどう

か許すいて！

## 第四十六話 知るかそんなの

「……何故止めた？」

『救世主』は、訝しげに言った。

勿論、それを言われているのは、現在『救世主』の首を刺す直前で、その行動を止めた『跳躍者』。

「それが『俺』のお望みだそうだ」

そして、変わる。

黒い光は消え、左腕は黒い塵となって消える。

「『跳躍者』、アイですか」

「ああ。『俺』の腕を止めたのも俺だ。

お前、避ける気無かっただろう………??」

ほう。と意思から感嘆の声が挙がる。

『救世主』は少しの沈黙の後、喋り始めた。

「私は、駄目なんです。

……もう、長い間生き続け、何度も善なる者たちを救ってきた、という自負ぐらいある。

でも、この戦いで、実感させられた。

人間は、脆くない。

今思えば、そうだった。私が居ない間だって、生まれてもない間だって、

争いを続け、破壊を続けても、それでも、人は、民は、生きていく」

「……………」

「私は、ただ、元から救われている民を、更にその上に持ってくるという、無駄な行為をして

自身の満足感を得ていただけです。

だから、もう良いんです。私は、元来生きていてはいけない存在。

ここらで終止符を打つのも、また一興でしょう……？」

瞳を震わせながらも、語り続ける『救世主』。

その姿には、確実に哀愁が漂っていた。

「…………ふざけるな！」

「……！」

「いくらお前。『救世主』自身がそう思ってもな！

それを”無駄な行為”と決めるのは受身の方なんだよ……！！

それなのに、それなのに、散らして良い訳もない命を、無駄にするな……！」

「……………私は……………」

すると、その姿に近づく意思。

「……………私は、こういう結末<sup>おわり</sup>を、待ち望んでいたのかもな。

『跳躍者』。良いだろう。お前の意思理解した！

元々は殺し合いをさせて楽しもうとした玩具<sup>おもちゃ</sup>。

それがこんな結果を生むとは、な」

意思是、どこか嬉しそうで、意外そうで、なにより寂しそうにそう  
呟いた。

「私は……………どうすれば……………??」

もう、民を救っていくことすらできない。

それなのに、ただ生けていると、貴方は言うのですか!？」

「知らないよそんなの」

「…………………………は?」

『救世主』が呆けて啞然とした表情でフリーズする。  
そしてソレを見た意思は。

「はははははは……! 何だそれは! ははは……! 面白すぎる!」

！」

爆笑していた。

つか笑うな。真剣<sup>マシ</sup>で言っただんだから。

「アンタの生き方はアンタが決める。それに俺は口出ししない。だけど、死ぬのは絶対止める。オーケー？」

そう言つと……

「ふ、ふふっ……」

あれ？ 俺またなんか阿呆な事言ったか？

「短い時間見ていただけですが……『跳躍者』。貴方は本当に面白く、良い人間なのですね。」

ふふ。そうですね。私が決めなきゃいけないんですよ……」

あー。ま、何だ？

とりあえず、説得？（だったのか？）終了ってトコ？



## 第四十六話 知るかそんなの（後書き）

シリアスから一転。いきなり空気が変わる。

この強引さ。まさにこの小説くおりてい。

これを許容できる人がここまで読んでくれているのでしょうか？

……真に、ありがとうございます&もうしわけない。

……………因みに投稿時間ギリギリだったのは、

直前までm h p 2 gとG O D E A T E R B U R S Tをやった  
りしたから。

（。。）／古ッ！ 前者が。

## 第四十七話 真実の最後の決戦・終

「望みを聞こう。まずは、『救世主』。  
何度にも渡る世界の大幅な改変。及びにその完善なる精神を賞しよう」

元々、四人を殺し合わせ、その果てに一人だけ願いが叶う死の遊戲に、俺と『救世主』。

二人が残り、そして『意思』に問われる。

「私が望むのは、……この悲しい戦いで、散った命を全て、再び光の道に、進ませてあげて下さい」

「!!--」

『救世主』が最後に望んだのも、やはりヤサシイお願いだった。だが、そしたら……

『安心しろ。『天使の末裔』と、『悪魔の王』の事だろう?』

「やっぱお前にはバレるかよ」

「別に読心しなくとも分かる。  
大丈夫だ。二方とも、記憶は一部改編しておく」

ありがとう。  
と言いたかったが、言えなかった。

だけど、ありがとう。

もう、アリアはこんな目に会わなくても、良い。  
俺の事なんか、忘れても、良いのに……………

「『跳躍者』…………やはり「良いんだよ」……………」  
そうですか」

「…………その願い。しかと受け取ったよ。  
私直々に向こう側に送らせてもらっ。準備は良い？」

意思是、『救世主』に真意を聞く。

『救世主』は、寂しそうな表情をしながらも、頷く。

「お願いします」

瞬間、『救世主』の体は光に包まれる。

「…………じゃあ、さよなら、だな。『救世主』」

「……………テレス」

「ん？」

「テレスティア・ツヴォルケです。私の名前」

「あ、ああ…………。さよなら、テレスティア」

初めて聞いた名前を言うと、笑うテレス。  
そしてそれを包む光が視界を覆いつくす。

「…………それと、『さよなら』じゃありません。  
……またね。アイ」

そして、その光が無くなった時には、もう既にテレスの姿は消えていた。

多分、きっとまた人々を、救うのだろうか？ それとも……

「中々感動シーンだったじゃないか『跳躍者』？」

「ツツ……………！！ば、バカ言ってんじゃねーよ！

それより、テレスも行ったんだからさっさと俺も！」

「ああ。分かっている。

次に、『救世主』。

その己の意思の、我でさえ変えられなかった不変の鋼。  
そして幾多におよぶ戦いの勝利を賞しよう」

「…………俺を、元の世界へ、返してくれ……………」

もう、この世界に未練は無い。

テレスの願いで、アリアは報われた。

なら、もう既にここにいる理由なんて、無い。

「それで良いな？ ……そうだ。コレを返しておく」

「……制服」

目の前に、『意思』から渡された、『HEAVEN』の『UNION  
stall』の制服。

……懐かしい。

そう思った。

こちらで時は、何年もたった。

……もう、あちらでは高校生か。皆は居るのだろうか？

そして、『H C - R』も……。

「じゃあ、送るぞ？ 私はゆっくりとまた、この世界を眺めて暇を潰すさ。」

……お前には最後まで良いものを見せてもらった。さよなら」

視界が白く塗りつぶされていく。  
周りにも光があふれ出ていく。

「ああ！ じゃーな！！！！」

そして突如、視界が変わった。

「……………知らない空だ」

背中が痛い。

それに、此処ドコ？  
周りに建物が無い。

左手は、戻っている。

つなぎ合わせた後があるので、どうやら『意思』がやったようだ。

「……アイツ。まさか送る所間違えてね？」

ちょっと、最後の感動シーンをどうしようかと思っていたその時。

気付いた。

「お、いおい……なんだよ、コレ」

視線は、勿論下。ただ、背中に当たっていたものが何かを見ようと  
しただけなのに。

あつたのは、瓦礫。

それも、ただの瓦礫じゃない。……建物。しかもここ辺り一帯に転  
がっていて、

深さも半端無い。

「……まさか、まさか、だよな？」

手に持っていた制服が、すり抜け、地面に落ちる音がする。  
だが、そんなのも気にしていられなかった。

「まさか此処が……『H E A V E N』か？」

地平線の彼方。落ちていく太陽を見ながら、そう呟いた。

## 第四十七話 真実の最後の決戦・終（後書き）

長かった。

そして文字数的には短かった。

…… 本当に、最後までg d g dな小説。読んでくれてありがとうございます。

昨日、投稿できなかったのは一概に『熱』のせいです。

七時に家に帰ってきた際、『アツーーーーー』なことが起こり、熱になり、

そしてそのまま寝てしまいました。

ですが、今日はちゃんと、最終話を投稿しました。

最後まで読み続けてくれた方、どうもありがとうございます。

そして、次作は、この忌まわしいテスト期間が終わってからですので、どうかご勘弁してください。

最後に、

今まで見続け、そして感想を書いてくれた方、どうもありがとうございます！！！！！！！！



## オモシロクすさまじくありがたくオモッテイマス

はい。シャーペン芯ケースです。

まずは、お礼。

このg d g d過ぎて、更には設定があやふや過ぎるこんな小説を最後までお読み下さったことに、思わずジャンピング土下座してしまいそうです。つか画面に向かっています、毎日。

何と一作目が、PV200000とかいってたのはマジで卒倒モノでした。

二作目も順調……??

そして三作目。

誰もが人目見て、「ああ。コイツは設定厨だ」と分かるようなものを、

まさか見続けてくれるとわ、まさに感謝感激。

はい。話が逸れましたが、まずは四作目のお話。

現在、実は様々にアイデアを無い頭で考えている途中で、しかもこの小説を書き中、リアルが大変な事になってしまいました。ので、少なくとも一週間〜二週間は空けてしまいますこと、謝罪します。

ですがあ!!

必ず良い小説にしてみますので、どうか待っていてください!!

はっきりに言って、現代超能力モノの方が書きやすいんだあああああ  
あ！！！！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9610n/>

---

In The Material ?=? World's Truth

2010年11月26日13時42分発行